



詩 文 學 研 究

第 四 輯

1939

東 京

詩 文 學 研 究 會 版

詩文學研究

第四輯

1939





は現在よりも大正期の方がよかつた。純粹の抒情詩が多量に制作され一般インテリ大衆に味はれてゐた。

——さうです、現在吾々もミドル・ブラウとしての詩作の生産と普及といふ仕事も一つ具体的に考へて見る必要に迫られてゐるのです、それには勿論大正期の抒情詩では不可ない、時代性を帯びた作品でなくては

——最近時局の関係から「日本的なもの」といふ文學上の内容的方面に關するタイトルがジャアナリズムのニュウス・ヴァリユを當てゝゐるやうですが、内容と形式との不可分な頂点として昂められ、國際的な糧を得て發展して來た吾々の詩が全然「日本的なもの」のみに據るとしたならば、どうすればよいのか、一寸見當がつきませぬね。

——民族性とか氣候風土とかいふものを詩に盛れといつた啓蒙的喚聲が近頃熾に有象無象に擧つてゐるやうですが、その事は謂はれなくても誰もが自覺してゐる時代です。要はその方法論である。ところが、その方法や實驗が一向に行はれてゐない。

——藝術は政治ではないのだから、さう簡單にはゆかないでせうが、いまのやうに啓蒙的文句ばかり叫んでゐても致し方がない、何とか方法を講じて見るべきですね。

——大正末期に日本の象徴詩派が終幕を告げたと謂はれた時、私は素材が並木公園ベンチ・アーク燈式で、その組合せの技巧も單なるエキゾチスムの目的企圖に満足して、日本の象徴詩が完成したなどは片腹痛いと思つた。輸入の新詩法で日本の素材が取扱へないといふ事はないと思つた。そこで私は先づ素材に純日本的なものを取扱ひ、その内容的企圖は東洋精神の清澄や靜寂を目的として多くの象徴的手法の詩を作り一卷にまとめて公にした。それには多少の自信もあつたが頗る好評を納めたことを今更考へてゐるのです。その後起つたシュウアルレアリスムの運動の際も同様の態度を私はとつたのです。現在の「日本的なもの」の方法論も勿論實驗してゐる

のですが、之は大正期時代の素材や内容では駄目です。

——それに詩に於ける内容的意味といふものが散文のやうに簡單に取込む事が出来ない。意味に重点が傾くと詩の純粹性が失はれて來ることも考へられますね、かういふ時期だから少し位純粹性は犠牲にしてもよいといふ暴論も謂はれてゐるやうですが。

——「詩文學研究」の第三輯で既に觸れて置いたのですが、一体、昔から謂はれてゐる「藝術のため藝術」とか「人生のための藝術」とかいふ常識的な概念のケジメが解つてゐないやうです。解つたやうな顔をしてゐても確然と擱んでないので何か論じてゐると直ぐ根本的にグラついて來る。社會的に客觀するとき、藝術は他の社會現象、例へば政治現象、經濟現象と同様に各分野の獨自的存在價值を占めてゐる。この意味に於て「人生のための藝術」でない藝術はない筈である。しかし藝術家が藝術それ自身のために努力する事は「藝術のための藝術」を發揮する事となるのは當然でせう。勿論、他の社會現象が相互に影響し合ふ事は事實であるがそのために藝術の獨自性（純粹性といつてもよい）を失ふことは、その人生への使命を反つて投擲する事であり、藝術の社會的現象としての存在價值が無意義になつて來るのです。吾々は各自の獨自な持場を忠實に守護し發展させる事に據つて社會的にも國家的にも貢獻すると考へた方が妥當である。これは最近の問題である「純粹性」といふ言葉にも相通するものがあります。

——全世界の新しい詩運動の導火線であると謂はれてゐる佛蘭西あたりの現代詩と日本の現代詩と比較して見るとしたならば

——それは言葉の相違や各流派や傾向が錯綜してゐて速断はむづかしいのですが、尠くとも私は現代日本の第一

線に活躍してゐる中堅詩人の作品とフランスのそれとを比較して、日本の詩は優るとも劣つてゐるとは思はれな  
5。

—その点、大いに自負してよい解です。

—ところが一つ遺憾な点がある。それは日本の所謂既成大家と稱せられる人が、あちらの人とは比較にならぬ  
位頼りないのです。

—有明氏あたりが「詩は廿代で終る。」などと謂つたりした氣概が不可なかつた、つまり日本の詩人は若い易い  
といふのです。

—いや私はかう考へるのです、一体日本の詩歌といふものは、嘗て社會的に封建制度が嚴守されてゐたと同様  
に、詩歌人の生活、換言すると詩歌壇の機構が亦封建的であつた。この封建的な概念は明治から大正となつて詩  
の方面だけは或る程度まで崩壊した。しかし短歌や俳句の方面は舊態依然としてゐる。詩人がこの封建的宗匠觀  
念を有名になると同時に無意識の裡に行爲に移してゐる關係であらう。何のことはない傳統の精神の悪い部分だ  
けを生かしてゐるやうなものだ、俳句や短歌の人々と同じ生活觀念を抱いてゐる高名な詩人が存在してゐること  
は日本の詩のために大きな損失であると思ひます。勿論積極的興新の仕事をしてゐる人も少數はあるが……

—所謂宗匠といふ觀念ですね、秘傳の一卷は高名を獲得するのみで、あとは何の勉強もせず永遠の先生様とい  
ふ……

—さういふ處に進歩的氣圍など醸される筈がないのです。詩歌懇話會が松本氏の斡旋で創立された當時、西  
條八十氏の主宰に係る雑誌から、この會の感想をアンケートされた事があつたのです私は封建的觀念の助長とい  
つたやうな存在にならぬやうならば大いに賛成すると御答へして置いたのですが……

—詩歌懇話會からの延長である詩人懇話會賞の授賞問題で白秋、犀星の兩氏が「改造」で泥試合を演じた。そ  
れについて「中央公論」で金子光晴氏が辛辣極る罵倒文を書いたのですが、世評は、この内幕の暴露は自らこの  
會の機構と人材を物語つてゐると謂つてゐますが、第一、この日本詩の代表的團體である會に高村光太郎氏や川  
路柳虹氏やその他の有力な人々が缺けてゐるのは疑問ですね。

—メンバーの完備といふ問題は藝術団体にはすべてむづかしいのです。まあ、そんな事は個人的に種々理由も  
あるだらうからよいとして、私はこの會の中樞的人物である白秋氏や犀星氏の詩壇的態度が不可ないと思ふ。白  
秋氏が詩壇にも、を言ひたいのなら何故詩壇的に積極的の仕事をしていないのか、氏が詩と短歌との二刀流であ  
る調法さが多くの誤解を醸し易い。詩壇は一度高名を獲ち得たからといつて努力と勉強と進歩を示さずノホホン  
を決め込んでゐると直ぐボロ糞に貶される、かういふ無頼漢の多い、うるさい詩壇などはと見切をつけて封建制  
度依然たる短歌の方へ逃避して寧日を送るといふ態度では誤解や不信任を蒙るのも尤だと謂はれても致し方がな  
い。更に犀星氏などは「詩と決別する」といふ隱退的言辭を幾度大ぎやうに謂つたか知れない、それが、このや  
うな會が出来上ると忽ち何が持株の株權でもあつたやうに威張り出すといつた態度などは猛反省すべきだと思ふ  
のです、吾々は白秋氏や犀星氏はもつと進歩的なエネルギーを抱藏してゐる詩人と信じてゐる。水臭い態度や勝  
手な權利を交々に使ひ分ける不真面目な事は斷念して敢然、第一線の人々と偕に詩道に働き、その上で所謂詩壇的  
權利を主張して頂きたいのです。

—詩に限らず藝術は飽く迄も實力本位であるべきだ、詩歴や年功などの評價や恩典などは自ら別の方法で遇す  
べきだ、無名詩人でも優秀な人々はドシドシ第一線に推すべきですね。

—將來、この詩人懇話會賞が如何なる詩人に與へられるかを見守つてゐよう、時代を推進さしめるやうな詩人

に與へるか、又は時代に逆行するやうな詩人に與へるか、その授賞行爲自身が之の會の詩界に於ける存在價值と信頼觀念とを決定するでせう。

——現代詩は難解だと一般に謂はれてゐますが、エリオットなどのやうに現代詩が難解なのは現代自体が難解だから當然だといふ説も一應は背るのです、しかし、その難解な現代に生活してゐる人々が、その詩を感受理解出来得ないといふことは一考に値しますね。

——私は近頃になつて現代人には現代詩が一等よく理解出来ると信するやうになつて來た。最近刊行した私のエッセイ集の批評が「東京朝日」に出てゐたが、その中に「一般的な印象では、詩は一種のアナーキスムに陥つてゐるとしか思へないが、實際は模索と實驗の一時期に解したい云々」と述べてあつた。吾々は長い過去に於て詩精神發動の根本問題で余りに多辯であり過ぎた。一向にその方法論が規定されてゐなかつた、現代に於て吾々が詩を藝術の一分野としての特徴的實證論を熱心によつてゐる慘憺たる態を批評家が觀たならば、或は印象的には一種のアナーキスムに陥つてゐるかに思はれるのは尤だと思ひますが、實際は先行的な問題や觀念を無視してゐるのではない。詩を宗教だとか愛だとかいふ空漠たる理解から離れて實體としての本質を知らしめる事に依つて現代詩は難解から解放されるのだ、と信じてゐるが故の仕事なのです。

——詩が解らないのではなく、詩を識らないのですね。

——さうです。私たちのやうな可成古い詩歴を通じて來た者は、絶へず古い殻を脱ぎ捨てやう、古い墳墓の上へ躍り上らうと努力してゐる苦悶は一通ではない、處が若い人々は新鮮な聯想や構想を案外易々と仕上げてゆく、これらの人々は現代詩を自らの時代に體驗してゐる調法を持つてゐる。出來得る限り私は新しい人々の啓發を受けて前進してゆく覺悟でゐます。

——一体に初心な詩作者や詩の讀者を取扱ふよい指導機關がないやうですね。

——私自身、過去に於て余りさうした仕事には手をつけてゐませんでした、最近といつても此處數年前から、ある機會があつて以來ずつと指導的な一つの仕事を始めるやうになつた。この實驗と經驗に依つて一般インテリ大衆には現代詩が難解なのでなく、全然詩が何者であるかを識つてゐなかつたのだといふ結論に達したのです。現在でも詩や文學に全く因縁のない私の周囲の人々が詩を識つた事に依つて、相當難解であるとして一般に思はれてゐる現代詩をよく理解感受し、更に自ら詩作までも始めて、そこら邊に威張つてゐる著名詩人の作品などよりも優秀な才能を發揮してゐる事實は何を物語つてゐるのでせうか。先輩詩人が詩を指導するといふやうな事は不要だといつても宜しい。唯詩を知らしめる事のみで充分です。下手な指導などは反つて詩を逆行させるものです。——現代人は確に詩を求めてゐる、未知數の詩にあくがれてゐる。吾々の詩の普及運動に依つて詩を理解する人々が増加し、更に詩作を始めた人々に有望な才能の芽を發見したりするとこの社會的に恵まれない仕事に努力する捨石的な役割が愈々重要となつて來ますね。

——さうです、吾々は新日本の現代詩を吾々の手に依つて建設し、吾々の努力に依つて多くの理解ある讀者層と詩作者とを増大すべきでせう。どんなに犠牲を拂つても之の手をゆるめまい。

無數の埴輪は詩神とともに埋れて冬眠してゐるのではない。彼等は新らしい血と生命とを呼んでゐるのです。

## 詩と對象

大砲それ自体には何の意味もない。亦、大砲そのものが、大砲それ自体に於て存在する筈のものでもない。例へば、戦争といふ一つの對象と結ばれた時、此處にはじめて大砲の存在も可能となれば、亦同時にその意味も生じて來るのである。

詩それ自体には何の意味もない。然し、社會的に存在する一切のものに、無意味なものあり得よう筈が無い以上、詩人が詩を書けば、其處には必ず何等かの意味が生ずるに決つてゐる。

斯くて、それ故にこそ、詩人に望ましいことは、詩を社會生活の如何なる對象と結ぶか、と言ふこと

である。別の言葉で言へば、如何なる對象の中に詩を發見するか、と言ふことである。

詩への盲目的な宮仕へは、最早今日の詩人の爲す可きことではない。

## 詩とリリズム

亡びて行くものは、リリズムの着古された衣粧であり、常套的なポーズであつて、リリズムそのものではない。

詩に於て、リリズムを一つのイズムと考へることの馬鹿々々しさ。斯くて、詩は出來そこなひの論文となり、小説となり、或は、文字のモザイクとなる。

り、戯畫となる。

亡びて行くものは、着古されたリリツクであり、袋の鼠になつたりリカルの手法であつて、決してリリズムそのものであつてはならない。

## 詩と内面生活と

歸納法的に考察すると、優秀な詩作品には必ず作者の内面生活が表現されて居り、小説の場合には逆にその外面生活が描かれてゐる。右の結論は、既に一般に承認されてゐる。

今此處で、詩が小説の終る處に始まるのか、或は小説が詩の終る處に始まるのか、と言つたことは問題にしたくはない。とにかく、詩が詩の分野を確立し得るには、今後は以前に比してより一段と切實に詩人がその内面生活を表現することに根據を持つてあらうし、亦同時に、詩が人間の内面生活を表現するのに、最も適した文學型式である、と言ふことを強調して置きたい。

## 科學者と技術學研究者

モダニズム或はそれに類似の立場を表明した一環の詩人——彼等は、詩の分析に没頭したことによつて、一つの功績を残した。然し、結局その綜合化全體化を忘れたことに於て、一つの罪惡を犯したのである。

即ち、彼等は詩を技術學的に研究した一種のエンヂニアではあつたが、詩を全体に於て把握し得た科學者ではなかつた、と言ふことに譬へられる。要するに、エンヂニアばかりでは科學は進歩せず、そうかと言つて、科學者ばかりでは一台の工作機械すら出來上るまい。詩に於ける詩人の資格は、例へば須く右の二つを兼ね備へたものでなくてはならぬ。

## 詩が書けなくなつたら

詩が書けなくなつた——若しこのことが、君の書かうとするものが、詩に於て充分爲しとげられない



ことに原因するのであつたら、それはそれで仕様の  
ないことであり、亦それでもよいではないか。何も  
詩の分野にのみ嚙り着いて居なければならぬ事は  
ない。活潑に他の文學の世界に舞台を求めて進出す  
ればよい。そこには、關稅障壁など無い筈である。  
若し、それも出来ないならば、ペンを折るより仕方  
はない。

眞實のところ、戀を戀し、詩のために詩を書く、  
といった工合の詩人が多過ぎはしまいか。詩が書け  
なくなつたら、ペンを折るか、さもなければ、ペンを  
肩に他の鑛脈でも探しに出かけることだ。愚痴と末  
練は見よいものではない。

### 詩人と呪文

詩人が、詩を神秘の祭壇に安置し、その前に額づ  
く時、彼等の作品は、彼等の間にしか、即ちその宗  
派にしか通用しない經典となり、呪文となる。その  
宗派に屬する詩人の數が如何に多からうと、所詮そ

文字をならねばよいと言ふものではない。

### 分析と直觀

狂ひのない直觀と言ふものは、その人が意識する  
と否とに拘らず、常に狂ひのない分析によつて基礎  
づけられ、且つ強化されて行くものである。亦、一  
方、狂ひの無い分析は、狂ひのない直觀にまで、そ  
の機能を鋭く發揮する。

分析が單に分析に終るならば、その結果は、粉碎  
機のそれと何等異るところはない。亦、その背後に  
科學的根據を持たない直觀といふものは、事實、神  
がかり的なそれとキコールである。

詩人よ、その直觀を鋭くせよ。

詩人よ、分析のメスをしっかりと握れ。

### 文字と言葉

その言葉を生かさんとするには、先づその文字を  
殺せ。文字を殺して、それと同時に死んで了ふ言葉

れは、その藝術性に於て、社會性に於て、結局その  
價値に於て、劣等な藝術であることを免れ得ないの  
は當然である。以上のことは、何も詩人について  
み言つて居るのではない。一切の藝術について、一  
切の藝術家についても、そのまゝ呈上してよいので  
ある。

### 知性と感情

知性の眼を開け、感情の波を激しくせよ。此の二  
つの對立する行爲を、對立のまゝ激化せしめて行け  
やがて、それは對立するものではなくなつて行くの  
だ。

### 量と質

日本酒を飲むやうに、ビールをチビリチビリとや  
るのはよし給へ。飲むことに變りは無からうが、そ  
れはビールを殺して了ふことだ。と同様なことが詩  
作についても言はれる。量は質を變化させる——唯

——それは言葉ではなくして、文字の投じた映像に  
過ぎない。

殺された文字の中に、依然として生き續けて行く  
もの、これこそ言葉である。

文字で書かれた詩は多い。然し、言葉で書かれた  
詩はさう多くはない。

言葉なき作品の氾濫——

それは、文字で作られた一幅の戲畫である。

### 詩の領海

今日、吾々は、遠い時代に於て爲された様に、法  
律や哲學や論理學を、詩で書く必要はなくなつた。  
と言ふことは、逆に、詩に書き得るそれらのものが  
なくなつたこと、即ち、それ等のものが詩によつて  
充分に表現の目的を達し得られなくなつたことに歸  
因するのである。そのみならず、一方、小説、戲  
曲、隨筆等の新たなる勃興と發展とによつて、文學

全般の母として位置した詩が、實質的にその領海を急速に狭められて來たのでもある。然し、このことは、何も詩の滅亡を裏書きし、衰退を物語るものではない。逆に、この過程を通じて、詩は一段と純粹に、且強力に、その分野を確立し、その機能を發展せしめ得るに至つたのである。

即ち、廣義に、文學全体乃至藝術全体を意味した詩から、文學の一カテゴリーとしての詩にまで、その姿をはつきりと浮き彫りさせて來たのである。

歴史は、社會に於ける一切の分化と専門化の過程を吾々に教へる。事實、時代や社會の推移につれて、一切のものがより分化し、より専門化することを余儀なくさせられて居る。そして、この現象は、將來益々激化せしめられて行くことであらうし、亦其處に社會發展の本質的な問題があるのもあらう。

ところで、文學の世界も、勿論、此の滔々たる分化への動きの中に在つて、無關係であることは出來得ない。

前にも述べた通り、詩の領海は甚だしく狭げられて來た。然し、此の分化の問題と詩とを結び合はせて考へる時、今度は、逆に、詩が益々その領海を擴大し得ることが發見される。なるほど、詩は、平面的にはその領海を次第に狭げられて來た。然し立体的にはいくらかでも伸展し得る可能性を持つたのである。そしてそれは取りも直さず、詩が詩自体の分化、特殊化の道を押し進んで行くことに他ならぬ。

詩の領海を擴大することは、決して、他の文學カテゴリーの領海に詩を潛行させ、降服させることではない。

## 詩の目的・意識の増進

(假題)

エデイス・シツトウエル

新らしい詩人の主要なる目的の一つは意識を増進さすと謂ふ事である。美術乃至文學の目的はヴィリエ・ド・リイルラダンの主要人物アクセルの如く使用者達が吾々に代り、すべての仕事を處理しなければならぬといふやうな状態へ吾々を教育することではない。それは吾々に増加したる活力、より熱情的な人生の意識、生活の力を與へることである。吾々は自らの観点を人に強要しようとするものではない。吾々の行爲は人々に、彼等自らの觀方を與へることにある。即ち恐怖を除去するのである。極く平凡な主題にあつても、そこには一千の風貌があり吾々は之の主題を斯くの如く觀ると説明する。これは次いで吾々が之の對象を各個人の觀方、觀念に經驗に到らしめる支授となるべきであらう。これは人生を豊饒にし經驗を附加するもので、更に最後に到つて彼の屬する種族の意識をも増大するに到るであらう。

藝術の先驅者達が特に甚しく嫌惡される理由の一つは、一般大衆が既成的な人生觀を固執してゐるによるのであるが、これは誤謬である。人は各々相違せる眼を以て觀て來たのである。大衆は視覺の劃一を好むのであるが、現在にあつて吾々が劃一的にものを觀るといふことは不可能である。モダニストの藝術家達は、吾々の觀點に於て個性を發揮する大いなる機會を與へてゐる。更に古い美、舊時代の大家達の美なるものは、種族と集團の美の中に存在してゐた——新らしい美は高度に個性化されて、各々別個なものである。現代の藝術家達は、集團そ

それ自身の事象には無關心で、集團を型造る各々の個的存在——これらの個的存在は人間、木の葉、又は海の波などであつても——の運命の移行に情熱的に興味を抱くのである。すべての藝術は舊時代の巨匠達の偉大な特質は、科學的意味に於ける力である。世界の分子を集結さす事である。それが多少なりとも彼等の構成感をかくも重要にさせたのである。現代の巨匠達の偉大な特質は、原子可能性を探索する爆發的エナジー、即ち分子を離散せしめることである。これが先驅者の詩の特質であり、亦危険性なのである。モダニストの詩人の不變の意圖は——この原子の可能性探求の必須に於て、論理的構成と形式の必要とを相互にチグハグにならぬように努力することである。今日の詩の第一義的なものは、より効果的な表現、より正確なる形式を持つこと、更に修辭（善意の修辭）への關心である。表現を効果的に顯はすことと、修辭とは同一ではない。劣悪な修辭とは皮層的修辭無意味な修辭、詩の素材と形態とは關係のない心象を指すもので、之は劣悪な詩である。ステイブン・フィリップスを生誕させたのは劣悪な修辭である。しかし、不變に修辭を敵としたウワーズ・ウワーズは別として、あらゆる吾々の偉大な詩篇は多少なりとも、その修辭に據つて創造されたのである。この實例を示すためにはミルトンを検討して見よ。吾々は其處に、手ぬるい描寫、穩健性、詩に淡々たる間色を顯はす手法などに據つて弱勢に置かれた状態と洗練された氣力とを畏怖する必要があるのである。

詩に於ける今一つの必須條件は、藝術作品の二つの組成分、——それは精神的部面と肉体的部面とを指すのであるが——の相互間に於ける均衡のより高度なる感受である。形式の方面に於ては、一つは自由の限界を飛躍し過ぎて空虚なものへと墮し、一つは余りに生硬に束縛し過ぎて伸長の逆効果を示してゐることである。この問題に就てエズラ・パウンド氏はドルメツチに關しての論說に於て謂ふ「如何なる藝術作品も自由と均齊との合成物である。藝術が一方に渾沌、他方に機械學、この間を彷徨するものであることは全く明白である。末梢的な細

部に術學的にとらはれることが形式の大部分を追ひ出す。確乎として形式の大部分を把握してゐることは、末梢的な細部の自由となつて來るのである。」と、これは眞理である。——藝術作品に於て獨創の實證となるものは無粉飾な行間に獨自性を醸し出す事に外ならぬ。同時に現代にあつては末梢的な細部の美に對する狂的な憎惡——比喩的説明に謂ふ嫌惡——が生じて來るのである。この二つの事象の間に於ける關係を認識する事は不可能である。それ故、森羅萬象の意圖を認識し得ない人々は隱喩を骨董品と稱してゐる。謂ふ迄もなく、最も偉大な詩とは、その構造感を何ら混亂することなく轉落し得るが如くに、心象がその外殼の裡に被はれてゐる詩ではない。心象を構成から分離せしめることが不可能な詩を指すのである。諸君が既に熟知してゐるやうに、その骨組が如何に優美であつても、肉と髪とがそれ以上に美を増すものである。乍然、今日の英詩は、一方には不具で無力な骸骨の積極的な納骨堂があり、他方には安物のリノリウムの幾反かが充満してゐる倉庫がある。——これら凡ての恐怖、人生、狂氣、更に自由詩形に對する恐怖の故に外ならぬものである。エリオットの指摘した如く「この自由詩形なる言葉は曖昧な語である。……これに耳馴れてゐない人々には、すべての韻文は自由詩と稱ばれよう。」と想はれるが故に。

屢々大きな呼聲が齎される、人々の口や新聞紙上から——現代藝術は狂氣である、換言すれば非理性的である——といふ不評が起つて來る。この不平者側が誤謬してゐなければよいがと思ふ。あらゆる偉大な藝術は非理性的の要素を含有してゐる。藝術なるものは最も純粹な最も合理的な形式の構造の中に含有された非理性的な精神であることへ謂ひ得る。この論理的な形式又は構造を無にしてゐる處では非理性が狂氣沙汰となるのは當然であらう。論理的形式の中の非理性的な精神がシエクスピヤ、ミケロアンゼロ、ダビンチ、ベートフエンなどといふ創造家を生ませたのである。他方に於ては非理性的な形式の中に於ける論理的な精神が、デイリイ・スケッチ

のゴッツプ氏、超現實主義者達、巴里在住のすべての似而非的英米詩人群、ドスモンド・マツカアサイ、トニツク・トオークスのドクタア・フランク・クレイイン等を生ませたのである。藝術は魔術であつて論理ではない。この非理性的形式の中に論理的 정신を熱狂的に追求する事は、現在の劃一を追求する有害な狂者の願望の一部分をなすものである。——婦人が、男子との間に於ける彼等の外貌と目的との差異を廢棄せんと努力する時代、個性の廢棄、各個の容貌（それは實際的に消滅したが）の廢棄に對しても布告の發せられた時代に於て。大衆がその劃一に於て、個性的な視力を與へられた藝術家を嫌惡するといふのは之の個性嫌惡に由來するのである。乍然、吾々が新しい詩の領域、新鮮さ、従つて更に珍奇な領域——あらゆる藝術に於ける——を考へる刻、この新らしさを考慮する人々が感ずる憤懣なるものは、あらゆる時代に於て、その時代の藝術の先驅者達に對しても抱かれたと同様のものであるといふことを忘却してはならぬ。この憤懣が如何のように藝術家達に苦痛なものであつたとしても、人類にあつては、それも亦當然の事なのである。更にクリストファ・コロンバスにとつてはガレリオスペインに馬鈴薯の一畑を發見したのみでは何らの益もなかつたであらう。またニュウトンにとつてはガレリオの發見した眞理を發見したのみでは何らの役にも立つてゐなかつたであらう。これらの事は藝術にあつても同様に謂ひ得るのである。元來、藝術家の任務は、吾々はすべてを吾々に知らしめてくれる事である。藝術家の任務は吾々の父や祖父が幼年時代より話した事を一語も間違へず正確に吾々へ再び聞かせてくれる事ではないのだ。乍然、大部分の人々は廿年を過ぎると疲勞してクリストファ・コロンブスの發見の旅行へ引き出されたり、ニュウトンの發見した眞理にまで謹聽させられることを好かないのである。彼等は、間もなく彼等自身もそのやうになるのであるが、この不慣な心を苛々させるものが古典となつた曉には、それは古典として知られ、更に次の時代の人々には

其の事については何ら苦しむことなく其の美を當然のものとして享受されるであらうといふ事を忘却する。そして、この不知なるものを嗤ひ、その不慣な幻想的な形態を嘲笑する傾向が多いのである。大多數の人々は、何か重要な同時代人の作品に就て常に述べる如く次のように云々する。「これらの發見は人類に何の重要な使命も齎さない。」と。如何にして彼等はこのことが理解出来るのか。すべての使命は人々の相互間に於ける感傷的關係に係つてゐるのではない。それは詩の依つて來る唯一の形態ではない。現代の詩の部面は甚しく多種多様である。モダニストの詩人が人間性に對する愛情を全然持つてゐない。人間性に何らの關心も抱いてゐないと早斷するとは誤謬である。最も進歩した詩の多くは——吾々にとつて最も不慣なように見える詩——意識の成長、換言すれば、睡眠より目覺めた意識を取扱つてゐるのである。時に依つては諸君は盲人のようであつた。意識が始めて樹木の本性、花の本性、雨滴が物象にかゝり落ちる本性などを如實に識り、その本性なるものを觀て仄かにも彼等の存在する意識状態の外部の何處かに動機、意匠が存在してゐるのを識つてゐるのである。意識の動物的状態なるものが、内部から形態を捕へ來つて、その濃厚な暗闇の裡から形態を展開し始めることを諸君は識るのである。何故なら意識なるものは、渾沌の裡から形態の發展と緒に、何物かを物理的に把握する力と緒に、始まつて來るからである。（「詩の實驗」のエッセイ。前輯紹介。MK抄譯）

麤脂の焔

丹羽哲夫

麤脂色の貴女の美を

水が支へて運び

水は明るく

頬は燃える

陽炎に頬は燃え

雙手を縛された私は

隻手を舉げて波に突つ立ち

それは影のない飛沫となり

それは執拗に貴女に降りかかり

*J'aimé.....*

*Je n'aimé pas.....*

狂的な言葉のみ撒き散らし

しかし貴女は？  
貴女の眠るボツブの中に  
何かと沈み  
何かが燃える

出發

青い眠りが白雪の高原を越えて走つた 僕はカバンを抛け上げた  
さやうなら 僕の學生帽は鳥と共に飛び立ち それは一つの黒点を  
残した

しかし最早すべては見えなかつた さやうなら 僕の村よ？ そし  
て僕の村は斷層の彼方に盲目の愛を翳して僕を送つた その時僕の  
村は火災で焼け盡くされてゐた そしてそれは火災ではなかつた

僕は水平にコルベンを投げつけた 歪んだ風景はプロペラのやうに  
飛び 突然 大きな鈎が僕を縛つた 僕は極めて正確に廻れ右した

すると空も僕と共に一回轉して僕の前には縞のある海があつた 忠  
實な影を常に海底に見ながら僕は限りなく上昇した 墜落の太陽は既  
に僕の遙か後にあつた

青銅の夏

近刊詩集「田舎の食卓」より

木下夕爾

★

ながい晴天のあと  
アンブルグラスのやうに光りながら  
スコオルの一隊が来て  
この村を洗つた  
僕のパンセを洗つた  
あらゆる乾いてゐるものを洗つた  
そして美しい陽の下で  
青銅の立像にこびりついた小鳥の糞が  
新しい薬品のやうに光り出す

★

BONJOUR

まどをあけると

夏が  
パラシユウトのやうにひらいた  
明るい孤をゑがいた  
灌木の茂みの上に

★

若い樹の枝には風のヘアプがおくられる  
夏は一枚のカアボン紙のやうに光りながら来た  
僕は水色のランプシェードを買つた  
そして今日の新しい洗濯剤のやうにいい天気です  
おお 大麥といつしよに  
僕の不眠症も刈取られる

★

畑にしゃがんで噛る  
薄荷草の葉は  
ジレットの味がする  
Mentha piperita といふラテン語の味もする  
あ 舌といつしよに

僕の記憶が切斷される

★

カタバミの葉っぱは  
暑中休暇のやうに酸っぱい  
僕は中學生だつた  
たくさんの宿題で  
僕らの夏は重かつた  
青い青い空  
白い白い雲  
寫生帳のブランクに  
僕はペンペン草の實でカタカナを書いてゐた

## 航海

清  
水  
達

地圖を擴げてひとり呻うな吟なるのである  
その彩さまざまの配色板をうち眺め  
荒々しい鬨牛を裡に抱へ

海の泡沫を一つ一つ數へる  
奔馳する牛の鬨志を宥め  
やがて住む  
スイート・ホームの設計に多忙なR君と共に  
靴先を並べて喫茶店に入る  
春の陽光が  
余りにもスプリングのある体操をし  
體の腐魚のやうになるのも  
彼女のためならば仕方もあるまい  
と

語るR君の姿を遠目鏡で覗き  
ふふふと笑ふ

ヨーロッパ地圖の極彩色が動員して  
飴のやうにのびた  
毛のある心臓をそつとノックするので  
氣も狂ひさうな青緑あざい海を  
化粧室化粧室の窓から

こはごはと想つて悦に入り  
ああ

手の伸びない寫眞は絶景じやな  
と ノートに記す

そして流行歌を歌ふが  
この鬚が氣にかゝるダンディ

海をごらん  
膨れた海

ヴィナスを讚へよう

蟹のやうな面した奴が居るが

あんな「海」を君は好むかね

——ハイ アナタ 私ハ水晶ノヤウニ透明デアルトコロノ私ノ母ヲ持

ツテキル青イ青イ海ヲ好ム——

すでに出帆のどらが海面をなで

私の腕には動脈が膨れだした

壁に鏡でとめられた

C氏の肖像畫を見よ

われわれにはわれわれのちからがある

われわれこそわれわれの航路を知る

瘦せ細つてゐる彼氏にば

もはやサインを求めめる必要はない

R君よ R君よ

と

航路の異なる海を泳ぎ

おもひおもひの波を探ねる

三 行 詩

長 谷 雄 京 二

A

指ト指ニカラム清水

膝ト膝ニカホル火花

太陽ヲ濡ラス峽谷へ



指から指にわたるかけ  
ゆうかりくぐるひざへ膝に  
にほひを逐うてぬぐふ肌

^1939.8.7V

花のある患者

葛井和雄

暗がりに晝の洋燈を吊し  
陽の入らず  
壺一つのみを枕によせ  
尻は襪ひきの綿に浸み  
愛なし  
銀なし  
早く死ねと言はれ死にたしと言ひ  
雪解け水解け  
この日ごろ口あけてのみ眠る

その蒲團の上を  
いつか音たてゝ春の水流れ  
その窪んだ顔の眼底には  
黄色い菜種の花がいつばいに咲き  
わたし生きると言ふ  
蝶の姿などして見せる  
涙見ゆ  
あはれ

陽日

緑葉 動かす  
鳥 鳴かず  
太陽 眠り  
白き褥とこは汚されず  
青き紗とろの女ら  
魚体となり  
地上 しづやかに

神 しばし  
まどろみたまふ

昭和十四年五月廿八日

### 初 夏

奈 良 進

鑛山へつづく白い石ころ道。素早く雲の影がよぎつていつた。  
そのあとから女がひとりいつた。派手なパラソルの汚れが目立つ。蟬  
がかかるがると鳴き、ほかには犬つころも歩いてゐない午後の氣はひがし  
た。——パラソルを傾げた白い服の女は、木履の音に清潔さを想はせて……  
彼女はあぢさいを摘んだ。汗のにじんだ掌から、海を越えて來たふ  
るさとがうつすらと匂つた。たとへばそれがあんずの核心を噛み砕い  
てぶつとはき出した時の酸っぱい味のやうであつたとしても——、彼  
女の夫はやつぱりのろくさとスコツプをひねくづてゐたにちがひな  
い。  
また山脈がきらと光つた。高い山脈の残雪が……。

### 眞盛の夏の夜

小 池 亮 夫

高樓の廂の  
反を交はし  
老槐の花の絢爛を亂れ  
へうへうと  
あやしさを  
城壁の隠所を  
ぬけ出でて今宵も  
蝙蝠の群れ  
闇の底しれなさを掠める  
眞盛の夏の夜  
まことに死を賭けて  
ぢりぢりと、つたひ匍ふ  
汗の脂に  
肌をすり寄せ

先づ理性の頭を  
血祭に  
雨の手を  
次は雨足を  
假令この胴体だけに  
なり果てんとも  
北京の薄物の快樂に  
情念を擬し  
いのち矢ふ。

## 夕顔抄

渡邊和郎

かまきりの下腹で空にひかつてゐる一筋の草があつた。  
私は白い柔道衣の少年の頃を回想し、  
地球を支へてゐる露台の上で、  
トルコ色の灯がともる。  
その無言律の窓の寂しさをぢつとみつめてゐた。

しばらくして夕暮の約束をおもひ出し、  
テラスからだんだんを降りてゆく。  
降りたつた地下室の明るみのほとりに、  
甲冑虫色の受話器をとつて、  
私は耳の底で硬ばる唇をひきしめた。  
私の頭髮にはねかへり眉の周囲をひくくとぶやうに、  
生死の境をうろたへてゐる若者のおののきがつたはつてきた。  
肘のあたりで明るく喘いでゐる花辨に、  
星が誕たまれたばかりの貌をうつしてゐた。

## 霽間

雨で洗はれた新しい秩序の路をあるきながら、私は墜ちてゆく雨雲を  
帽子のかたすみけとめる。  
テューリップの葉脈が産れるやうな音をたててびんと伸び、  
セピア色の虫どもの甲羅に一ミリの脂がはじける。  
菱形の線の中では緑の日溜りが鮮明に膨れあがつた。  
雲の徂來が心に映り、

透きとほる音楽が女の背後で反射する。  
花卉店の硝子窓で、  
消えてしまつた驟雨の雫が明るい四肢にとまつてゐた。

## ある風景

八木國夫

蠡螭が青い姿で入り亂れ。ヘッドライトが鋭角に流れ所く街の沈鐘。  
浮き出た蜃氣樓は合歡の花々よ。俺が空木のやうにへたへたと。街路樹  
に斜めに眺め。跛行して行く黒い影と。生物のやうに紙屑が白く舞ひ上  
つて行つた。舗道は油ぎつた肌えで。假睡むで居る。ふと遙か鞆を揺  
らせて。。。。港の碧い雜草が空をつき刺したやうに疎ましく。白い  
シャツの少年が星の彼方を追憶する。あゝ。塵埃に埋もれて慄く父よ母  
よ。。。。青糝のおとなふ街。見れば小波一面の銀鱗にきらめく  
俺は不思議な聯想に苦しみ吾と吾が胸を抱きつづけ。颯。吾が肉体の  
壓動を叫ぶ。。。。何時か。蛇行して行く深い水流の影は。すみき  
つた精神の階音。。。。星空の下で。俺は一個の黒龍に化つて居た――

## 愛

堀口太平

私は機械工場を通り抜け  
倚子の浮んだ空に昇る。  
まはりに花束が散らばつて  
倚子は斜めに曲つてゐる

愛情

性交

子供の指切りよ！  
あゝ、どこが違ふのだらう？

私は腰を下ろす。  
曲つてゐる倚子を直した虚空よ！

ミルクよ、木苺よ！

ジツと見てゐる中に  
この私はだんく呆け

たゞ白つぽく消えて行く  
あゝ、白つぽく消えて行く

## 歡 び

君よ！見給へ

五月の風にもまれてゐるあの若葉のしなやかさを！

× 私心の美しさ × 私心の柔かさ × 私心の淨らかさ  
× あれは見てゐる私の心そのものなのだ

× 私は 私のこれ等を信ずる事が出来ると云ふ  
× これは何と云ふ幸福だ

× この歡びは君の手をたづさへて  
× 天の淺瀬を徒歩ち渉る様な歡びだ

## 新 居 記

挽 地 英 夫

風景が新まると人情も新まる  
私は枝を大きく展ひいた竹林の前に坐してゐる

若私が日記を書いてゐるとしたら  
きつと新らしい頁に新らしい家の様子を書いたであらう

青空が亭々とした杉の喬樹をくつきりと表して

私のぐつと伸した指の筋が太く脈うつて見へた

私は二度も三度も玄關から門までの距離を歩いてみた

十、二十と數へ乍ら歩いてゐる中にもう數に馴れ切つて石を蹴つて駛  
けてみた

緑の思念に包まれた私のまはりに  
蟬はミン／＼と鳴いた

くるみの實、栗の實 裏畑の土の香ひ  
都會の一隅にもこんな靜肅な地上があつた

近頃讀んだある雜誌に「風景としての言葉に依つて、感動の自然を抒情」  
するのが作品にとつて最も必要な事項だとある

私は唯一人になつて靜透した感覺の世界に風景を劃する生活を味ふと  
してゐる

百日紅の枝が緑に突き出て小さい花をつけてゐた  
きら／＼と夕映の空が鏡の中にあつた。

二五九九・八・作

## 秋朝の釣魚

西山五百枝

鶏鳴  
河聲  
沸騰

漏水  
猫聲

嬰兒が泣く

スパークが鳴る

地震が鳴る

警笛

階段登る音

鮫の音

犬が叩かれて聲を出す様に

車が軋つて鳴る様に

爆彈が破裂して轟く様に

樂器が鳴る様に

潮騒が鳴る。

蓮 沼

多賀城

蓮の莖に蓮の葉盛上り  
青い雲の脊に  
はげしい生命ながら孤獨の眠り。  
蓮花は高雅に灯り  
掄の中に女をいたはるほどの傾き。  
ほのぼのと響く蓮の下蔭を分けて  
聖衆の佛畫涼しく  
さすが一族の故郷がこひしい風の中。  
蓮の實噛み噛み蓮の芽苦く  
蓮糸に揺れる噂の明るさ暗さ。

愛 憎

俗習の絡んだ岩肌に  
脳漿に似た花が咲いてゐる

猿酒にかくれた企みを崩し  
蔓を剪る此の片意地なまこと

光年の矢となり 雲降り  
星屑に似た花が絡む

十四年八月十三日

散 步

伊野亭 二

街をあるいてゐたら  
たそがれが私に話しかけた  
またお散歩ですか？  
彼はおぼえてゐた  
十年も前から  
私が街をあるいてゐたことを  
けふのやうに佗しく  
けふよりも佗しく

化 粧 (抒情詩)

いたづらに時は刻ときみ  
遠き人つねに  
わが胸を赤きいろに染む

狂ほしき光のもとに  
人知れぬ涙をのごひ  
われ女おんななれば化粧けいずんす

## 晩鐘

塩谷安郎

何も書かれてゐない手帖のやうな刻のなかで寺院は年老いた  
狭い苑は疲勞して瘠せてゆき、小鳥の亡骸を雜草で匿したりした、  
石段はいたくしくも枝々の下にうづくまり愚痴つぽい苔を置いたり  
した、  
不意に轉りをりて來る犬を捉へて風のやうに囁いたが  
リポンのやうに尾を延ばして犬は駈け去つた、  
時には花のやうな笑ひを乗せてとりくのスカートが並べられて

撮影機が虫のやうに鳴つた、そして再び花粉のやうに散つて、風は無  
表情に流れた、

梢が囁いた、いつのまにか細い陽の手がとゞいて來た、  
石段は安易に習慣的な伸びをした  
肋骨がかすかな音と共にすり落ちた

## 月夜

昏れてゆく森かげに鮮やかに掲げられた回想の灯、  
その周圍を蟻のやうにとりまく數多の白い指たち、  
風は髪のごとくかすくしの物語りをなびかせて  
杳かの海港でする投錨の音と共にどんくの間隙へと流れ込んでゐた。  
やがて飽和したわたしはその場に醜く嘔吐はじめるだらう、  
病んだ野猫のごとく、



歎きあるものへ

國 廣 勝 太 郎

酔<sup>サ</sup>昆<sup>ニ</sup>布<sup>フ</sup>の様<sup>ニ</sup>な<sup>リ</sup>香<sup>ニ</sup>が漂<sup>タ</sup>ふてゐるは、と、ば、  
もの想<sup>シ</sup>ひに耽<sup>リ</sup>けつてゐる茜<sup>ア</sup>色<sup>イ</sup>のゆ、う、ぐ、れ、

漸<sup>シ</sup>騒<sup>ガ</sup>の中に歎<sup>ス</sup>戯<sup>シ</sup>の洩<sup>レ</sup>れるあなた<sup>ノ</sup>思<sup>ハ</sup>念<sup>シ</sup>  
わたしの胸<sup>ニ</sup>はまつしぐらに焰<sup>ト</sup>となつて炎<sup>モ</sup>えあがる

想<sup>ハ</sup>出<sup>シ</sup>の夢<sup>ハ</sup>は貝<sup>ノ</sup>殻<sup>ノ</sup>の歎<sup>キ</sup>となつて渚<sup>ニ</sup>に碎<sup>ケ</sup>散<sup>リ</sup>  
この白<sup>々</sup>さに震<sup>ヘ</sup>てゐる淡<sup>い</sup>一つの幻<sup>影</sup>！

揺<sup>レ</sup>れてゐる海<sup>無</sup>数のひろがりをもつ波<sup>紋</sup>  
浮<sup>き</sup>つ沈<sup>み</sup>つ もつれあふころとこゝろ

ほぐしてもほぐれないものは、げ、し、さ、  
海<sup>の</sup>な、が、れ、に續<sup>い</sup>て あゝ灰<sup>色</sup>の網<sup>膜</sup>が――！

嚙<sup>ミ</sup>しめると甘<sup>酸</sup>つばいゆ、う、ぐ、れ、の、は、と、ば、  
夢<sup>の</sup>やうな感<sup>觸</sup>が肌<sup>を</sup>くすぐつてゆく樂<sup>し</sup>さ

雨 夜

松 村 一 美

ひたいから時折流れてくる  
軽い氣候は白くぬれてゐた

窓ガラスにゆれたり  
空の色にそねたりして短い祈禱を續けた

町はマスクをかけて  
神々に近寄る

土の匂<sup>い</sup>ひは  
私の胸<sup>の</sup>なかまで聞えて

そこで私はたひらかな  
明日の日をデッサンする

詩 信

△出征陣中の會員▽

小 松 茂 彦

もう雲雀の律も落ちた丘陵の巒  
氷のやうに張りつめた息吹きのかげにひそむ屈託のなか  
薄あかり わづかに紫のいろがうつる  
お 淡い夢のやうに遠のいてゆく人馬の影繪  
そして壕をつゝむ風  
昨日も明日もなく風のなかのものういまどろみ

△どこかで石段のくづれてゐる時間

たえまなく野蠻な挨拶が交されあひ

無数の姓名が分裂してゐるすさまじい時間▽

雲は絶えず流れてゐる

茫々と緑の草原にかけを落す月明をみだしたりして

血漿のういてゐる國境圖

喪はれたあまたのだみ聲がひややかにもつれたりして

× ×

たれかれは祖國をたまらたく愛ほしんだ

封書のもたらすこんなにも不思議な香り

故國にはいつさいの罪惡などはないやうな

いつまでもさわやかな花園でもあるやうな――

郷愁はこの丘陵の鈴蘭とともに美しく匂つてゐた

× ×

みたされぬ宿願のまゝ

つぎ／＼消えた戦友や軍馬や――

あそこにもいくつかの白い墓標があつた

ときには血なまぐさい風信をきゝ

野の草にわびしく揺られながら

この地の涯につつましい世界をもつのだと

戦争も平和もすべてかなしい物語りなのだ――

## 郊外散策

桑門つた子

短い上衣の人々　ポツンポツンと散らばり  
飛行船がとんでお伽話が並木を過ぎれば  
アンリ・ルツツオは人參を嚙りつゝ眠る

誰しも一度は此の峠から微笑を返すだらう  
あの日は白いむくげが咲いて  
涙の海にいつばいに包まれてゐた私であつたが  
今の野面は風がそよぐと　軽く　軽く

——好きな曲の　主題

——遠い部屋のヴァイオロンは水色のリボンに結ばれ

あの人にも悲しい事はあつたに違ひない  
流れる穹よ——  
私はこれらの色彩をすつぽりと風呂敷にくるみ

背負つて  
再び　戻る。

## 雑話的戯畫

長谷川霧子

★  
淡れ層の静謐にそうて天使が降りてきた  
ちそ色のドレスの裾をひいて　そしていつた  
——今夜は風が死んでゐます　で生魚を食べたら　驢馬にのつてオビ  
アムを喫じて下さい。

★  
レッド・ジャスマインの花束をかゝえて

少年が頬を染めてビルディングを横に折れていつた  
あの少年は癩癩なの　私の友達はわたしの耳をひつぱつた  
狂つた鑼と拍板の舗道に  
セロハンの造花が一輪咲いてゐた

★

西瓜の核子たねを前齒でかむ人も  
ボタン穴にアザミを挿してゐる人も  
パリケエドの時間は憂鬱だつたから

★

直線的構成のどこにだつて開花期なんてないよと  
八ツ頭のやうな手の人は栗の花の下で  
一枚の紙をひろげ 一枚の白い紙になる

## 晩 秋 景

柴

俊

介

1  
錆びた扉。

古風な風かぜに老ける石門である。

裂けたサボテンは星を求めて公轉し、  
無花東の枝に影が動かない。

駛る落葉よ、山茶花よ。

すべての窓々が羽をひろげて横になる。

少女はパイプを銜へて自動人形になり、

白いテラツスに凭りかかる。

地平線に風を切り園は叢林に消える。

舌をふるはす汚れた芝生。

ブレエンソングに彼方むかふへ曲る小徑。

夕日は風の翼に屈折し野犬の夢を破る。

角のある空気が白い牙を身構へ。

2

黒い馬車が通り過ぎる。

森の鏡に寒い旗の沈み、

カリヨンが雲に這入る。

少女は洩れた噴水に腰を下して、

リボンの歴史を考へる。

疲れて息づく裸の花壇。

棄てられた花籠。 縫れたブランコ。

空へ落ちる白鳥が白い偏圓を遠ざける。

兎小舎に蜜蜂はピアノを叩き、  
少女の瞳に動脈を動かす。  
昔、歩行した若き昆虫の群落。  
一本のピンに屍を刺す黒蝶。  
少女は「はっ」として季節の匂ひを感知する。  
矢は弓弦を切り、秋をすべつて少女の唇を射抜く。  
太陽の唄が貧血を繰返し、時計台に村と雲は混雑に佇み――。

3

荒廢れた橄欖畑。  
没える太陽の雞を打つ園の休息である。  
金網のある煙突は傾き、  
枯れた莓草に温床は傷ましく肩を落す。  
剝げた木椅子が骨格を投げる。  
冷い太陽の通す白い榊停に風向は變り、  
薔薇の叢に神話は逃げる。  
失意の季節よ、姿なきアネモネの死よ。  
飛ぶ群鶴が一線を劃す。

光は野にこだまし、  
少女は楡林に石門を出發する。  
白い夢の沈む丘に囁き。

轉 居

小 林 正 純

皺くちやの紙幣のやうな  
私の頭には  
この春巢立つた雲雀が鳴いてゐる  
やがて私の視線が  
翳雲に濡れ落ち  
鈴虫の軽いリズムを踏みまする  
時圭は秩序を奏ふセロリスト

そんな風に  
冷たい味覺を聞き乍ら  
鬭争を好む小動物達の

騒音を畫くこと

静かなるよる、  
すき透つた弱音を飲み  
尖火を振り振り  
古いディスクを噛みまする

## 抱擁

かちかちと軟い金屬性の觸れ合ふ音を夢見る青年 その逞しい胸像  
を過ぎるものは蚯蚓の歌聲か ゆらゆらと隠い綠色のシュミイズが燃  
える炎の音を聞く乙女 その豊饒な乳房に匂ふのは貝殻草の花束か  
ぼろぼろと 夜の微風が崩れる 二つの肩に  
銀製のハンモックに凭り懸る 四つの瞳は なほも薄惚けた 杏い  
山脈に噴水の手紙を托した

## 年齢だけの歌

竹内はじめ

手を曳かれ夜を通つた  
幸せのために眠るかちどきの實は裏側にぼろぼろと目覺め  
汗をかき  
つぶらな瞳を眞剣にそむけて  
はげしい頬は生きてゐた  
昨日迄の聞えぬ囁きをかきあつめ  
ささやかな倫理を夢に灯す

時間をお返し  
不意に空がしらみ嬰兒がどつと泣き出す様に夜が明けた  
目の前に何の苦もなく掌を觸れたとき  
はるかな肩と思へた

無作法な指ながら  
交換的な愛情に響き傳はる

△あなたの笑みが生活に値するV  
見送りの空 晴れたり 曇つたり  
ちぎれる會話の影をうしろに  
涼しい朝  
風の下  
ひと口の水を迫つた

### 花を拒否する園

木  
村  
茂  
雄

花を拒否する園には  
弓<sup>ゆみ</sup>状<sup>じやう</sup>の反<sup>そ</sup>りが  
蠅のむらがり<sup>が</sup>に多忙をきわめる  
銅貨の鐘を撞き  
息をはづませた執念のフィルムだけが  
脚の痙攣に  
ごろん ごろん もんどりをうつて  
體に絡みついては

生命の量をだけ散らかす

だから  
羽音のやうに  
雨を降らした  
蛙が來て雨の脚にとびあがる  
攀るのではない  
雲が目にしみるので

音符の逃ぐるのを追ひ縋つて  
雲のうたを欲するのだ

うたが微笑むと  
園は受動的な植物のノートに  
戯れかける夢を  
土の匂の立昇る圓柱に  
希望を知る

花を拒否する園は

涵養の蔓の渦紋を感じた  
斑のすきまに眞珠色の氣泡の  
つぶやきが生れる

言葉の想ひ出

あゝ  
こんざつの園よ

圓柱は色彩の行ひに悦びの翅蟲を

飛ばせて

溯る精神の響が

光線の槿木をもつて

フィルムの過剰に

適度の美貌を打ちつける

園は圓形の叡智に瑠璃草の歡びを  
満足させるのであるが――。

### 巨女の目覺め

――或は現代の支那――

梶  
浦  
正  
之

ジャング ジャング

ゴング ゴング ゴング

木酒精メチルアルコールの滲んだ低い空で

點晴を忘れた青龍の銅鑼が鳴る

すでに聖達ハルカは苦い松葉を嚙んで逃げてしまつた

足早に曠野へ迫るは黎明の揚幕

千里の血草のベツトに臥よこたはる

巨大な女性メサイは 薔薇色の吐息とともに

いまや永い深い睡ネムから目覺め

華麗に汗しみた寢卷ネマキを脱ぎ棄てようとはする

薄い光に豊かな腰は曲り浮び

それを巻く濁流の黄ろい二本の帯

霞んだ岸邊に續く揚柳に阿片の煙が絡み

ボタンの穴から嚴封された軍用書類が



戦線の司令の手に鳩となつて飛ぶと  
目覺めた女性にょせいは欠かとともに象牙の腕を伸した  
丸く滑る袖の蔭かげに 空しい泡を刺繡する  
纏まと足の靴 コンパクト 容共のパンフレット  
夕映に奸漢が射殺される 顫ふるふ肩の丘で  
あゝ 緑髪の鮮やかなダイビング  
盛装の城郭が爆破される 背骨の上で  
槐えい樹の梢に裂された黨旗が懸る頃  
ゆらゆらと昇るは蒙古の涯の陽ひかり炎えんだ  
ダダダ ダダダ  
ドドド ドドド ドドド  
旭光と機銃の点々が幾千年の不在わ証明の胸の扉に赫く刻まれる  
いまや華麗に汗あせしみた寝卷ねまきを脱ぎ棄てる  
目覺めた巨大なる女性にょせいよ  
素晴しい全裸となれ！

緑 蔭

塗ぬつて塗ぬつて塗りあげた緑・緑・緑  
盛さかつて盛さかつて盛りあげた緑・緑・緑  
陰影がリズムとなつて昂たかまつてゆく  
視野のキャンバス  
白金の花火を飛ばす風のパレット・ナイフ  
杏あんのく四阿あまの茶事……  
消えて香る裸婦……  
鳴らなくなつた樂器……  
じめじめと執拗しやくごうに生れ出てくる隠花植物の簇たばよ  
桃色の圓い傘だけが 菌きのこの耳だけが  
——コノ美シイ紅一点ノ幽カスカナ瘻ろう攀は草雲雀ノ古イさ、ん、ち、ま、ん、ノ唄ト  
想おもフノデスカ  
御覽、透明ナ蚊ノ腹部へ充サレテユク眞赫ナ血潮  
——コノ素晴シイ意欲ハ何ヲ意味スルカ  
問ふても問ふても答こたへない緑・緑・緑  
なぐりつけなぐりつけた緑・緑・緑

私は休息が必要です

ポオル・エリユアル  
川口敏男 譯

佗びしいひとつの貝殻が  
白布のなかで泣きぬれる  
子供たちは貝の周りで戯れる  
小さな羽のひびきより更に微かな呼吸のやうに

それゆえ、ひとつの貝殻は  
花の日の牝牛をさがして美しい牧場の中へ彷徨ひいる  
白晝に私はそれを見たのです  
見たけれど羞づかしくはなかつたのです  
それは、ふくよかな變曲の眞夜中になるのです  
かたはらの繰言に

優しい微光が巫山戯かかつて  
わたしの睡りを醒ますのです

存在すること

見失なつた旗のおもひがさびしい瞳にうつるやうに  
あなたの頬がうかびあがつてくるのです  
ひやかな街の  
くらい部屋々々  
やるせないおもひが千々に碎けるのです

どうしてそのままにできませう  
あなたのいりまじつた美しい手が  
わたしの秘めた鏡の中に生れでてくるのです  
愛するものよ  
残されたすべてのものが満ちたりても  
やつぱりあなたの外のすべてのものは私の世界でな

5の13す

あなたの影にあせはて土地を掘つていくのです  
匂ふ裸身の近くに瀑布ができるのです  
白い小石が沈むやうに  
そこで、溺れていくのです

そして、あなたはお何歳ですか

薔薇の匂ひを語ると  
青春の秘言がうしなはれがちなのです  
微笑みといふのは恰度あなたが生れでてくるとこ  
ろ  
顔をまはしてどぎまぎと  
言葉よりもつとつよいしるしが、すなはち微笑です

そして

わたしを魅了するこの美しい様々のしぐさたち  
こんなにも變り易く褐せやすい  
にくらしいままでしづかに装ほつた何といふ科でせう  
あなたのまへでは  
バタアに觸はる  
若々しい二本の手さへ眞赤にてれちやふのです  
そして、ふしぎに冷たい唇は  
羞ぢらつた  
歌の曲に生息づけられ  
何だかわからないやうなお別れのさやうならを  
言葉に消して

さうして秘言がながれていくのです

嘘の構圖

岡田武雄

嘘が  
裸体の春を盗んだので  
おんなの肌  
虹がこわれた

許るされた嘘になれた  
おところは  
ひとりゐる眞實の中で  
睡つてゐる

泪が

ワンピースの下の乳房を實らせ

みごもつた春情が

嘘の唇を露出にする

港

海が 疲れた櫓の上で  
手品使のように海鳩を飛ばせる

そして

おんならの愛技は

年と共に

嘘のうまい天使を眞似て來た

その後

商賣氣いつぱいの娼婦も  
百合の花など綴りながら  
海風は眞晝の天使である  
贅肉を覗かせた

郷愁の手垢に

ふくらんだ乳房は造花の吹霧器

モ  
家

古

水島秋夫

あの さばくの あのみやこの あのドームは ぼ  
くの父のかなしいロマン。  
あの くさむらの あのいしころの上の あの女佛  
は ぼくの母のかなしいロマン……

よごと そらいちめんの雲をくさらせ、まつかにち  
へいせんを焼き はるばる さばくをわたつてくる  
あのすさまじいひびきは いま うつくしく地球の  
洗はれてる ひびきであらうか。

あらしはつづいた。  
あらしはつづいた。  
そしてあらしはつづいた。

水夫は舌なめすりしながら  
海圖の上にオシコをする

ふるいみんぞくは破壊されることによつて  
あたらしいみんぞくを産んだ。あたらしい血が今太  
陽の子の胸にするどい音をたてる。  
見よ。いま さばくのそこでぼくらの父が笑つてゐ  
る。ぼくらの母が笑つてゐる……  
見よ。いま ごうせんとさばくには雨が降つてゐる  
のだ。雨が降つてゐるのだ……

みずのやうなつきのひかりのそこに ひろびると  
どこまでもさばくがねむつてゐる。さばくよ！ ね  
むつてゐるさばくよ！ エスガイの裔よ！ いま地  
球はぢんつうのなかにあるのだ。産れおちるものを

こんどは ぼくらが ぼくらの手でそだてねばならない。お前の上にこんどこそは きつと草原が生

## 憩ひのうた

嶺 皖 彦

れ花が咲くであらう。

菜莢の葉かけがいい

そのやはらかさに身をよこたへて

をさない日のひかりに熱ばんだ睫毛をおとす

せまい音階に とほくきのふの歌ごゑはながれてゆくのだ

微風かぜのいとなみにはつつましくゐたい

そのやうなをののきで

詩集のペーヂはあをざめたまんまの乾きかたをする

嫩芽の鱗片のほほに影のこすほどを うつむきかか

るしづげさ

しんじつせつなく 右左にのろのろとねがへりうて

ば

はだかつたふところから散らばるしみのやうな憂恨を氣にして  
またさらに胸こがす鈍痛が指さきからんでくる

菜莢のわかばをすけて

五月のあはい日ざしがふくませるまひるま

ふと そのあたりをかすめさる哀愁である

もう幾ときといぶかるおもたい眼がしらに

だれかれの手が面輪が ひとつひとつ想ひうかんで

こんな日 はかない Euthanasia にあこがれて

わたくしは胎兒のやうに身もだえるばかり……

## 海の祝祭

小林節子

風が吹くたび見るでせう 花粉花粉の合圖あひづらに隙間から

ベレンスの沈んだグラスに透明な菜莢の實を

この青春わかさの樂器がくをめぐる足音を盗みつづけた私の耳みみ

朶はな

青い夜の思念に翳かげされたフィルムは潮の匂ひにむせ

つかへつて

ついでに唇くちびるに起伏する戀話こひめづりの化石はことごとと貝族

の音がした

いきなり白々しいほどの武装解除を告げる海面のエ

ンデンに

まばらな木々をゆさぶつて 瞳は白光の姿態を伸ばす

碧いターベットの舞台に

オゾンの新しい擴がりが演ずる  
海の華やかな祝祭よ

## 裏町の黄昏

ガードの下で豆のはじける音がする

紙袋に鼻をつくこんだ少年は

煙硝たばこのほひを灯した眼で飛行機を數へた

中元の廣告ビラに悲鳴に似た音譜がひつかるとやがて

食欲は間歇泉となつてどぶ板をならすふしくれたつ

た生命に ノスタルジアほどの悔恨をきざんで男は

茶碗をたゝいた

煙管を銜へた横顔に 紙芝居の拍子木の音が湧き昇

ると

子供等は旋風のまろやかさで心をすばやく投げかけ

る 陽氣な話の屈折する町を

太陽は赤い練瓦塀にそつてのろのろと歩き出す

リズムある刺繍

藤 浪 里 子

そら色の手紙が投げこまれた日 雲の白いベルなど  
おして 蜜蜂のやうにじつとしてゐた私は チュウ  
リップの赤さにしみた羽がおもく 私は私でないも  
ののやうに流れてかへる

△私にも似た黒い蝶の影とともに▽

昨夜見た舞踊家の爪立ちに似た木々をつたふ

迎 火

茅 野 信 義

星のこぼれおちる彼方で  
ほろほろまはる炎<sup>ひ</sup> ゆらゆらゆれる炎<sup>ひ</sup>  
あつちの小草に こつちの夜道に  
緑の風はそよ／＼吹いて  
ほろほろと まはる炎<sup>ひ</sup> ゆらゆらゆれる炎<sup>ひ</sup>

て 夕暮の詩人がそのやはらかい肌を微風に  
からませながらやつて来た  
微笑の影さへない日の物語りは 言葉もなく坐る星  
の挿話にかはつて・・・だから私も今泉のやう  
なカーテンを下そう 黒いリボンで飾るねむりを忘  
れて

子供らは花の掌をそろへて  
「こい こい  
みんなこい  
炎をつけよう 炎をもらおう」  
ほとほとと頬をほてらしながら

長い袂をふくらませて

風の子になり 風の子になり

葉末の下で露をころがし

そつと 飛んでゆく 走つてゆく

川邊りの小石のむれも

ふるさとのみちしるべも

ほのぼのと 明るくほてり

すみかのまどゐにつるされるは

なつかしい日本の夜空

(註) 私達の郷土のお盆は舊暦の八月十三日からである。

其の日、夜に入る子供達はおしよらいと言つてタイマ  
ツ様なものに火をつけて近くの川邊りや、あるひは墓地  
にて打ち振りながら亡くなつた人達の靈を迎へるのだと  
いふ。今では大變さびれてしまつたが、それでも毎年の  
行事になつてゐる。

か た つ む り

全 田 修 三

ぬまのほとりを

あをく水のぬるんだぬまのほとりを

こまのやうな生物がある

そのいきものはごくのろのろと

ぬまのほとりを なめるやうに

はひまはり

決してころがることも

さげぶこともない

まるで淫佚なけものやうな

目にもいらぬひとつの

しづかないのちのすがたである。

蜂

あはれ汝が険ある眼の

するどき口舌なれば

やさしきおもひやりも心痛し

蜂よ！  
疾走して苦患を去らしめよ

## 労働者

やきつく傷害のわれから

冬木岐之介

逞しい饑舌に奴等は黒光りする碗碗を絡ませて  
健康な稚拙を吹き上げ六月の空を原始と野生の原色  
に塗りつぶす。  
戦闘と辛苦に凝り、厳しい圖囊を背負つて巧に人生  
のパスポートを握つて逃れるスパイ共

## 未亡人の會話

上松ちか子

あの人が落ちて逝つた一粒の罌粟はこんなに可愛ゆ  
く伸びて行くので  
わたしはそれに銀の縫糸を繋いでゐるのです  
或る覆面の男は

わたしの部屋のピアノの鍵を叩ききても  
煙草の吸殻に火を付けようとしても  
黒い蝶々と遊びませんかと誘ひに來ても  
わたしはそつぽをむいて子守唄を歌ふのです

## 河

佐藤青雅

姑息な戸板を横たへ  
小石を積み重ねたとて  
若猛るこの激流を  
如何に堰止められよう

逞ましい飛沫は響々と  
雲を捲き起し、風を呼び  
流域の蟻螂どもを慄はせ  
曉の大海原へ  
滔々と押し流れゆくのみ。

## 鄙びた朝顔

鈴木二郎

娘もつた嫁は  
いつも日向の椽側で——耽つた。  
筵の上で戯らける、  
親猫と  
仔猫が  
目蓋にちらついで  
縫針が動かなくなるのだ、

(愛)の破片がとび散るのだ  
親猫の齒が  
——白く光る  
嫁は汗ばんだ肌着を竿へかけた  
又、  
胎動を感じハット思つた  
(——隣澤の山羊も仔を産んだとやら——)

不安な、

豫感と、息苦しき―

微風に

柿の葉裏が魚のやうに跳ねる

## 白日夢

津坂霞

(「谷間の家」2)

おや

白い花びらが落ちてゐるよ 拾ひませう

いつか貴女の御手紙に 匂つてゐたきんせん花の色

僕は忘れません

あの時 珈琲茶碗に觸れた 貴女のリングの白い指

中指だつたかしら？

薬指だつたかしら？

久しぶりの握手に 薔薇の微笑は變らなかつたけれど

縁先の鄙びた朝顔が  
眼に泌みて哀しかった。

左手で持ち上げた憤水に 月の香りが邪魔をした

## メランコリーの幻想

僧衣を纏ふ月光のきざはし

夜會服の粹を競ふ北斗星の嬌態

假面マスクに亂れ 廣間ホールの隅でチークルージュが冷たさを

歎く

眼として 太古の蠻樂

バルコンに憩へよ 脈うつは王朝の官能 薄暗の

ハーモニー

## 戀愛以後の記

江越馨

一本の蠟燭の炎を封じて

あなたに 私的一切を ぶちまける

私は胸に驚を擁してゐ

今 それを あなたに 示すのだ

去りゆく そなたの骸に

この一文をもつて 窓開く

今日に

何ら 報ひを得ようとは

願ふところでないが

愛するが故に

自らを捨てて 花の一輪よ

幸くとばかり 私は喜び

そなたの 行手を 囑望する

今日は 昨日の續きではない

まさしく轉換機は動揺した

それは

そなたへの思慕ではなくて

己を 明日へ出發させやうとする

一つの賢明な方法的レベルである

逃けた夢なら 胡蝶とならぬ

花瓣の聲帯の破れを

繕つくはんとする私なのか

自らを知る處でないが

既に脚光は頼へてゐる

時計

森下舜一郎

ラヂオ体操 八午前六時

ハンドバツクにある青空だ

樹樹の青さが小さい

競馬 八午前八時

メランコリアな汽笛が波止場の方から聞へる

誘惑に勝てない駢馬が走つてゐる

電車 八午前十時

遮断機がおろされた

太陽は變な明るさを持つてゐた

海 八正午

列車は兵をのせて整然とすぎる

海鳴りの街道日の丸が並んでゐる

うらぶれし女

丸山吉三郎

蟹 八午後二時

泡喰つた蟹奴

偽善的なレンズにもお前は横這ひださうな嘆くま

い

軍事郵便 八午後四時

思想の炸烈、鐵の叫喚び

近代戰の幻覺は一束の花となる

豚 八午後八時

醜惡と惡臭の過去を押し隠した豚奴

ランデヴーの食卓に鼻を鳴らした

X 八午後十時

十三夜の月が明かる過ぎる

渚を洗ふ

浪の音が

私の言葉を遮る

砂上に坐した

うらぶれし女の横顔

貧困と病褥に呻吟く

骨肉のために――

をんなは夜ごと

紫煙と喧噪のなかを

愁ひにみつる瞳に

わが魂に

哀憐の涙をそぐ

迫りくる黄昏

難澁する帆船

陸にも

暴虐な

人生の波浪が――

支那兵の骸

小山達也

蹄鐵と車輪と鐵銃とが  
はげしくさつたあとに

小さな紅い花が咲いてゐた



餓と渴と狂はしい疲勞と、そして  
たえがたい怨嗟とをひきずり乍ら  
兵士よ、お前は戦つたか

ぐつとのばしたその手に

## 春の座

橋本史郎

野蜘蛛がはひまはつてゐた

砲煙の向ふに

惑亂した歴史が

火をふいて居た

ゆるやかな氣流の中に 燦びやかな星屑を見いだし

て 君自身に似た影を掌の底に強くいだゐた それ

は君の第二の生誕の日であつた

柔肌をくるんだ産衣を通して 交流する清淨な血

液の荷重をそつと意識した そして遠い記憶の中に

君は父といふ文字をさがした

あたゝかい肉親の息吹きをこめて 因襲の紅い手

## 青い風のある月夜

野田久子

毬の糸を いたけない生命にと捲く  
今はつきりと道は曉の苑に浮んだ 何んの胎動もな  
い静かな水面に 萬物みな緑を覆ひ  
雪洞のあかりのうへに 君のため春の座は謔かじめ  
ぐる ためらひもなく 僕は急鼓の拍手をおくる

—友・w君に—

月からは遠い山々へ 木々に親しく  
青い風は消え消の姿を土藏の裏へ  
柿の實をもつ小供の頭髮が答へる  
流星を探す大人の貌々も見えかくれて：

棕櫚が裸形の木立の中に唯ひとり

破れ葉に月光を切る頃

青い風はほのぼのと流れる雲を呼ぶ

空虚な私の心を過ぎゆくものよ

いつまでも闇に包まれて何者かを求める白い手よ

## あゝ刻

静かな朝 澄み透る碧空の白い花のやうな雲の一

## 別離

宮川蜻児

杳い紙風船をたぐるやうに  
あなたの掌の追憶は近よる

群は徒に淡い青春の夢を追ひまくつてゐた 霜柱を  
ざく／＼と踏む土手に立つては生々とした小鳥らの  
歌に過ぎ去つた薔薇の日々を想つたり 小流に小石  
を抛げては鮮やかな波紋に伸縮む自らの影や樹木の  
冠や雲の足などをぼんやりながめたりしてゐた そ  
して私はいつしらず手にしみたインクから生活の悲  
しさなどを想ふ 小流の描く可憐な美しい夢の中に  
ゆれゆるる齡若い女のひそかに抱く惱みなどは あ  
るひは幻の葩のやうにぼんやりしたものかも知れな  
い だが この手にしみたインクに感ずるものは  
ひからびた大人の生活の悲しいあととなつて あは  
れにも流れ去る青春の日の雲を忘れさせる：

あの日 四つの瞳が水平線を軟かく撫たとき  
あなたの胸に入道雲の動を見た

ウルトラマリンのサンダルが砂濱を忘れ  
その掌の中に小蟹が悲しみを忘れ

やがて海藻は頭髮のやうに岸邊に横はり  
青い波が暗い影を伴ひはじめた

う ら な い

—さあ お子さんは一人でせう—と見透した蠟燭  
の光を曲げ 白い鬚をしごいて街の觀相家はつぶや  
くのであるが

やつと逃げた埃を拂ひ 馴れた手つきでおく天眼鏡  
に 過去むかしを握つて來た手相が汗線にそふて浮上つて  
はこないかと 戦いてゐる女の指先はまだ幼すぎる  
のであらうか

その手をしつかりととらへ 今宵初てならんだ二つ  
の影をふみしめふみしめ 貴男の手はそつと私を促

こはれたボートの舳へこまを指さしながら  
寂しい無言の別離わかかれの言葉は取りかはされた

わたしは嚙み煙草の匂を  
光り始めた星へ向つて吐きつづけた

池 上 ひ さ 子

して杳いこれからの路程をきかせようとする

高い中指のもとに小さなみぞを集め 小指の下に  
私の感情をまがらせて消へた流は泥水であつたし  
切れた鎖をくくりつけ 編みすぎた目敷を といて  
ゆく術もない鈎針の編物も 今は私の運命線となつ  
てしまはれるころであらう

目深に伏せた帽子のつばをそつと上げ おくれが  
ちな私のあゆみを待つてゐる貴男の影と ふとぬす  
み見た昔の夜の 嘘を云へない若い戀人の瞳とを

瞳孔のしぼりの中にとらへた胸は刺されさうであつ  
た

けれどこのころの一つの事が うらないの人形と  
なつて私達の間にすわる日 背のびしても足りない  
私の低さは 熟れた心のかけらをも投出す刻をつく  
るであらう

### 消 息

- 丹羽哲夫氏—詩集「緑の假歴」 發刊。
- 木下夕爾氏—詩集「田舎の食卓」 發刊。
- 安田吾朗氏—詩集「歷程」 發刊。
- 小松茂彦氏—滿洲國守備隊として出征。
- 木村茂雄氏—詩集「貝殻日誌」 發刊。
- 詩文學研究會—本會中部地方會員主催、六月十八日、尾張稲浦。丹羽哲夫、宮川蜻兒、竹島正勝、伊藤道子、平野すみ子、藤浪里子、池上ひさ子、冬木皎之介、小林節子、野田久子、西川直康、板倉道子、渡邊和郎、上松ちか子、伊藤照子、伊藤文子、伊藤祥平、平野敏、近藤和子、皆川令子、梶浦正之の諸氏出席、午前は詩の朗讀、作品批評、午後は詩の理論を研究した。

街にはうるんだ灯が行列しはじめた ひとをまつ  
悲しさのにぢみ透る思を ひそかにもほく笑にして  
消したかつての人の瞳にも似て

- 梶浦正之氏—詩集「青風」 發刊。
- 全田修三氏—後藤敏夫氏等と文藝誌「作家街」創刊。
- 多賀城氏—同氏編輯の詩誌「火の山」は近く復活號が下關市丸山町一九五五多賀城方から發行される。
- 小田邦雄氏—八月廿五日札幌に於ける「文化の夕」に本誌發表の諸氏の作品を朗讀された。
- 詩話會—中京詩人會主催名古屋鶴舞公園前資生堂に八月二十日。出席者梶浦正之、伴野龍、丹羽莊一、丹羽哲夫、宮川蜻兒、小林節子、藤浪里子、西本輝子、石塚まさ子、稻垣美子、千葉具子、朝井道正、長谷雄京二、八木國夫、渡邊和郎の諸氏。
- 渡邊和郎、八木國夫、長谷雄京二、藤浪里子、小林節子諸氏發起にて詩誌「栖」が名古屋市中區鐵砲町三丁目 八尾傳方から創刊される。

新詩集評

例へば戦争といふやうな強烈な現實的對象などを詩表現する場合、大体二種のスタイルが存在してゐると観る事が出来る。それは寫實的な描寫を以て對象を生かす儘で顯はす客觀的手法と、一應この對象を作者の観智的な思考の裡へ解消した上で之を構成してゆく手法とである。勿論、前者は客觀的手法とは謂へ作者が直接戦線に加入してゐるのであるから自然主義的客觀性のやうに渦中外に立つて描寫してゐる所謂戦後戦争詩とは其の性質が相違してゐるのは當然である。ともかくも、吾々の過去の詩法の多くは前者の傾向を帯びてゐたもので之が現代詩にとつて効果的に不向な手法であるに拘らず、戦争詩にあつては之の手法が反つて効果的な結果を齎してゐるのは如何なるものに起因してゐるのであらうか。これは詩の内容的な方法論の分析に俟つものであるが今度の支那事變の戦場そのものが素材として新鮮である所以であらう。島嶼の生活感情に慣れた吾々にとつて茫漠たる大陸は一つの驚異であるといふ地理的條件、更に世界戦史に未曾有の立体的科學戰の種々相、尙その上に重大な使命を身命を擲つて致行

てゐる。この作者が散文に於て現實生活の新鮮なりアリスムに優れた才能を示した人的印象が無意識の裡に詩作品の評價へ振り向けられてゐるのである。吾々は之の詩集から作者の純情な立像を觀る以外の何物も感受する事が出来ない。純粹詩の表地から悠々と立ち昇つたりリスムの陽炎が成層園までも届いたとした處で、それは唯一人の三好達治の「春の岬」のみではない。これを亦或は藥村的ロマンに譬へる事も不當ではないが、この俳諧の中興に彩色にされたロマンが現代には之の作者以外にないのであらうか。吾々前二者に優るとも劣らぬ無名の新人が吾々の詩壇に無數に嚴存してゐるのだ。評者は先づ自らの周圍を懇切に觀よ。何でもかでもジャアナリズムを背景としてゐる作者や又は詩壇の局外者の存在の作者と觀れば賞めはやす弊癖は改むべきである。勿論このやうな作者に屬するものが悉く不可なりと謂ふのはない。例へば丸山薫の如き一寸新人に追従を許さぬ人もあるのだから。若し之の提言に抗辯があるならば聞かう、愈々となれば作品の實例を以て御答へする準備位は出来てゐる。

形態的に短詩の作品から受ける感覺には固型的なギョチナサや單純的幼稚性に陥り易い傾向がある。これは形式が規定する内容への影響に他ならぬものであるが、之の危險性を幸にも脱れてゐる人は尠ない。前者は散文的意味のみが多數に壓縮されてゐるのみで、作品の醸す心象の容量といふものが

する勇士群等々之等の素材そのものは既に異常な魅力に屬する。これは散文の方でも同様で所謂戦線ルポルターージュの文學が他の戦争と無關係な高度な作品と比較しても敢て遜色を認められぬ表現効果を有する事は實證された。この二つの詩法のよきサンプルとして佐藤惣之助の「怒れる神」と佐藤春夫の「戦線詩集」とを擧げる事が出来るのである。「怒れる神」は前者に屬するものではあるが玉石混淆の感があるのが残念、その中には頗る低俗な詩以下の作品までも加へてあつて優れた作品を印象的に痛めてゐる。恐らく之はヂャアナリズムの注文であらうが悲しい。後者に屬する「戦線詩集」には春夫のリリスムへの對象の攝取は明かに失敗してゐる。むしろ附録となつてゐる「江上日記」にその本領は光つてゐると觀るべきであらう。

散文的な意味的價値、心象(イマージュ)の性質、この兩方面から評價しても、大正期の自由詩的傾向と何らの進展も認められぬ林芙美子の「生活詩集」が一部の人々に好評を得

極めて僅かだ。後者は余韻の魅力を殘す表現技巧が足らなかつたらば全然失敗である。處で、この短詩型で成功してゐる例として二人を擧げることが出来る。その一人は津瀬準であつて彼の作品が示すものに固型的なギョチナサは比較のないこの凝集感を追従を許さぬ動詞止の巧妙な手法に依つて心象の豊饒性を齎してゐるからだ。この作者のスタイルは既に一家の風格を備へてゐると思ふ。いま一人は最近詩集「歷程」一卷を發刊した安田吾朗で、この一卷に盛られた短詩型には凝集的な感覺が全然ない。この作品は心象の効果を視ふために作品自体に現象的な技巧(例へば動詞の變化等)といふものを使ひてゐない。それで、如何にも淡々としてゐて伸びやかである。しかも余韻がある、この余韻が亦自由詩時代の所謂余韻とは全然別種な性質をもつ新鮮な昂揚性を放つてゐる角度が齎す素材の取扱ひの恐ろしい魅力だ。想ふにこの作者はグダイスムの新らしい領域を繪畫的效果へと展開してゐる。透明な、余りに透明な浮彫的效果。この詩集は高く評價され得べき前衛的一精華である。一二篇を引用して置く。

X X

みぎりの皮膚をした裸婦たちのそれぞれなポーズの花  
園の中で少年は地圖を思はせる素描を終る頃雪とふる  
言葉は少年と花たちと昆虫さへも深々うめつてくして  
青い宇宙の夜に地球のきしる音が快くひびき始める

斷橋を見通した空に椅子が浮んでゐる。さ新しい空を  
した少年は秋の筋肉にはづみをつけてかけ出す。橋名  
の古びた文字が桐の木片のやうになつかしくひびいて  
来た

同じく短詩型である白石軍司の「過程」は淡々としてゐて  
素描的效果と水彩畫的印象を企圖してゐるかに感ぜられるが  
今一步の對象への突入、または角度のアンガルに據る妙味が  
望ましい。

國廣勝太郎の「天使の饗宴」。嘗てリリシズムに相當の成果  
を納めたこの作品は内容的多様性を求め始めた。その手法と  
して現實的素材を濃厚に採りつつ新方向へ進行する過程のよ  
き一斷層を想はせる。唯、惜むべきは素材の取扱ひに稍々未  
熟の嫌があつて仕上げられた作品自体に洗練性を感ずること  
が稀薄である。

吉原重雄の遺稿詩集「風景の諷刺」。この作者は大正末期  
に筆者が在京中多少の交遊もあり、時折新宿の寓居を訪れて  
呉れたり、また昭和二年に創刊した吾々の「桂冠詩人」の同  
人にも加盟してゐた事もあり、そのひととなりは相當理解し  
てゐる。生前に發刊された詩集「難漕」を讀んだ時感じた

### 詩文學研究 第三輯 作品總評

多種多様なジャンルの花東がより透明な空氣、より高度な  
詩性の空間へ一勢に其の領域を擴大してゆく壯麗な作者は三  
輯に觀る。其處に與へられた多くの示唆は相互に厳しい検討  
を経て始めて新しい糧となるであらう。

竹内一氏の「肉体出發」の構成の肉付の巧妙なる融合は完  
璧に近い境地に迄昂められた近來の優篇。川口氏の定評ある  
句の詩のよきサンプルに筆者は白磁の肌を撫てゐる想がした  
同氏の優しい觸手はいつでも荒んだ吾々を抱いてくれる。柴  
俊介の「丘」梶浦氏は（白の詩人）と柴氏を稱んでゐるが、  
この作の12にも之の感覺が顯はれてゐる。しかし、筆者は  
例へば1に白色を2に綠色を、3に赤色をといつた色彩の聯  
想を企圖されたならば之の作者の本領は愈々發揮されてゆく  
であらうと思ふ。「春への歌」池田氏は對象をよく自らのリ  
リシズムへ消化してゐる。「地上」「聖夜」葛井氏は人生派  
的傾向のよき進展を示してゐる。新鮮で具象の意味を嫌味な  
く攝取出來得る佳作。「地上」中四行目座らせ、は坐らせ、の誤  
植、編者（樺澤氏）の「私信」は池田氏のリリシズムとは異つ  
て嚴しい現實を背景に漂はしてゐる第五聯の老巧な表現には  
感服。奥保氏「北方」之の凝集化の恐ろしさ、まるで銚子の尖  
や水銀の毛管現象を觀てゐる感銘に近い。それでゐて憧憬の  
ロマンの韻を流す「標空」の白眉。西山氏の詩篇は主に海洋

ことであるが、この作者の表現がニヒルに近い肉付を多分に  
示してゐるに拘らず、その讀後の感銘はそれとは正反對の効  
果を齎してゐる。この現象をゆくりなくも筆者は彼と最初に  
面接した光景に結びつけるのである。「明大の法科にゐたの  
ですが病を得て湘南の地にゐます、今の私にとつて詩表現が  
唯一の生活記録です」と低い音聲で謙讓なこの自哲の青年は  
語つた。筆者が熾に煙草をくゆらすのを見て寂しい瞳を動か  
す、この青年は煙草をやらぬのかとも思つた、暫らく話して  
ゐる間に彼の瞳が何か欲求の烈しい輝きを示し始めた。「煙草  
やりませぬか」と出した箱に「止めてます」と答へる。燃える  
瞳と瞳とが詩に於ける思想の問題に熱中してゐたのであるが  
いつの間にか彼は和服の袂から朝日を出して朗らかな微笑を  
浮べた刻、筆者はホット救はれた想ひであつた。散文的精神  
が一つの規格を押賣する。この病弱であつた青年の胸底には  
現實的なものに對する憧憬を否定する行爲が、その實生活を  
規定しようとしても、尙生きんこする本能的意欲が魂と肉体  
の一隅から觸手を伸ばし始める。筆者は生理的なものの作品  
に及ぶ影響といふ事を單に肉体的のみ考へる事を斷念しよ  
うと思ふ。あの燃える瞳、臨終の刻まで作品を書きつづけた  
純粹な詩人の瞳は、恐らく清澄に變つてゐたと信じてよい  
のだと筆者は痛ましい自己満足をしてゐる。（梶浦生）

的な主題が取扱はれてゐる。この作、漢字の抽象性が現實感  
を稍々退化させてはゐまいか。奈良進氏の「美しき七月」は  
サタイヤと強靱な意欲とを構造してゐるが、總体的不調和の  
危険性を聯想の有機的飛躍に據つて巧にも脱れた異作。渡邊  
和郎氏の作品は所謂紀行詩篇の型に嵌らず作者の角度や主觀  
が伸びやかな姿で詩句中へ融けてゐる。しかし、この作は今  
少しの單純化を望んでよいと思ふ。渡邊曠彦氏の「白日三題」  
は幻想的な表現の裸に明確な構圖が浮んでゐる手法の「眼醒」  
を白眉とする。堀口氏のダイヤモンド的聯想と形容、「昇天」に  
單純性を求めるは無理であらうか。木下氏の「都會のデッサ  
ン」は誰にも好かれて而も詩の本格を失はない優作。「II」  
に於ける最後の一句の如きは追従を許さぬ。木下氏の爽やか  
な都會詩には、凡ての角度から視て現代の詩界には之に優る  
人材は無いと謂つてもよい。梶浦氏の「青嵐」は具象のみを  
感受しても充分であり、更に具象の意味を攝取するを望めば  
それも亦可能といふ、所謂純粹詩にプラスするものを有つ新  
境に成功した名品。第三輯の全會員の作の裡、筆者の腦中深  
く刻みつけられた最後の作は竹内氏と梶浦氏の二篇。この二  
篇には一寸やそつこでは奇りつけないと思つた。この二篇に  
はやがて亦多くの模倣スタイルが詩壇に顯はれて來るであら  
う。それでよいのだ。新しい模倣はイミテーションではない  
新しい飛躍だ。

長谷雄京二氏のモンタージュ的壓縮性にはウニツクな心象

の容積がある。そしてこの作の聯想の新鮮。小池氏の「ロマン」の作者は「鵲」の同人として定評ある人。いつもながらの豪健なスタイルには壓倒される。この作今少の具象的な現實的描寫が望まれた。川越勤氏の人生派的背景の構圖は葛井氏とは正反對のスタイル「夜の坂」に觀る如き何事もなき一点景を淡々捕へ來つて生かしてゆく心憎い迄の老巧さ。清水達氏の聯想の飛躍は新手法をよく生かし長谷川霧子氏のアルハベットの形態に纏る心象の豐饒の新鮮さ、しかし之の表現は稍々作品を生硬にしてゐる嫌はなきか。法城寺氏の爽やかな都會詩は木下氏に次ぐ境地だ、今少しの單純化の技術な。國廣氏の作品は近頃非常に洗練されて來た。「昇天」は浮彫的畫壁を想はせる。上松氏「雪景」の新らしい實在と形容との同時的表現の手法は現代であるが、斷片的に模倣の句があるのが難。梅澤氏の作、氏の意圖する内容的複雑性は了解出来るが表現の洗練性が足りないと思ふ。丸山氏のものは漢字の持つ抽象性が氏の内容するものを現實感にまで昂めてゐない。自らの感覺の儘の表現を求めべきであらう。津坂氏の「書齋」は着想が常識的である。「夜霧」の壓迫ある思念を佳品とすべきか。松村氏の「追憶」は素材が常識的である。もつと現實に就いて觀察するか又は素材の新鮮を視ふかを試みては如何。「應答」の無駄のない抜き挿しならぬ短詩が心を引く。嶺氏の「砂丘の詩」このサンチマンは不變である。しかし、角度のアンゲルに據つて更に新しいサンチマ

ンが出来ようといふもの。堀江氏の満洲色を欣しく満喫した吉成糸子氏の作「追憶」は素材が平凡。「秋」の方がすつと近代的である。伊野氏の何気なく書き流してゐて妙に何處かで響かする老巧を現象的に探索して見ると二篇ともに最後の一行のきかせ方に驚いた。ウニツクなスタイルだ。塩谷氏の思想の具象化は各行句に滲み出でゐる。唯「青い夜」に於けるフキルムの回轉の句が幾度か繰返へされてゐるのは今日の詩法としては効果的か否かは一つの疑問である。佐藤氏の「北壁」今少し新しい創造的形容を使ひたらば成功を納めやう。小松氏の特異な漢字と言葉の醸すリズムカルな手法には撲たれる。木村氏の「わかれ」は北國人でなければ到底不可能なカラアが濃厚。江越氏の作は諷刺的ニヒルが顯れてゐて興が深い。挽地氏の作者の感概を全部謂つて了つた處に余韻の迫力が薄い。杉山氏の「花」は多少理窟はくなくなつてゐる。茅野氏の「宴」は銃後の事變詩として佳作に屬するもの、意圖も角度もよいが肉付が豊饒に過ぎた嫌も稍々ある。伊藤氏のリアリティは冬のブロンズと但書はなくともよくそれを感受出来る。桑門氏の「小さな貝殻」は企圖するものへの道行が長いので迫りに缺けた嫌がある。この人にはもつと優秀な作品がある筈。前田氏の純情素直な出發は欣しい。これから新しい角度と主観が織り込まれてゆくであらう事を望む。冬藤井氏の作は素材と聯想更にその取扱ひが常識的である。冬木氏の「北の掟」の峻嚴な烈しい氣迫、梶浦氏の「豹」を讀

むやうな氣がする。小林氏の女性ならでは捕へられぬ微妙な境地、「訣別」を第一の作とする。藤浪氏の「白い手の祭」は先般の詩話會でも問題になつたさうであるが之のリズムと色彩との動的な表現の新鮮さは追従を許さない。大橋氏の「除夜」は現實的角度が遺憾なく發揮されてゐるが、例へば追憶といふやうな同じ語が幾度も繰返へされてゐる不注意がある。

次に試作欄に遷るのであるが池上、野田の兩氏は文句なく完璧の作と思ふ。勿論、前者の單純性、後者の現實感等の注文はあるにはあるが、それは兩氏が今一步進出してからの檢討にしよう。さにかく之の二氏は最早會友たるべき人である事は衆目の一致である。垣しげる氏、松本祐順氏は同じスタイルの作であるが加藤靜夜氏に觀る如き新鮮な角度がほしい紀幸子氏の描寫は初心としてはよく對象が觀察してゐる。伊藤氏の單純化は巧妙である。稻垣氏の生活的背景から生れ出た動的表現は大河原氏の作ささも欣しい出發である。石田氏の奥行ある作風、石塚氏のナイフの刃を觀るやうな牙へたスケッチ、田中氏の單純な型で顯はす爽やかな作等は有望である。朽木氏の作は今少し地方色がほしい。例へば邱淳洗氏の作の如く。初井氏の作は所謂銃後の詩であるが言葉が濃厚に過ぎて反つて効果を薄くしてゐる重厚な言葉を多く使ふことは必ずしも作品に迫力を増加するものとは限らない。鶴直皓生氏の抒情詩的佳品は完璧に近い佳作である。以上で全員

作に大体眼を通した事になるのであるが、何分にも限られた紙數と多忙のため印象的批評に終つた事を諒された。(KOBAYASHI 生) △之の種の批評文を募る。約九枚以内、取捨は編者に一任の事。編者△

何の豫告も致す暇もなく突如として約三年振りの詩集を發刊いたしました。實は此處一二年先きにしようとも考へてゐたのですが、事務局、原料價格の昂騰が甚しく、且亦、小生の希望する材料すら入手困難の懼さへ濃厚となつて參りましたので意を決して刊行いたしました次第であります。

本書は詩界には一寸類のない豪華版であると聊か自負いたしました。所か又は小生宛——愛知県海部郡佐藤村勝徳二六三番地 梶野名古屋二四三五番へ直接御願ひいたします。

切に同好者の御愛讀を冀ふ次第であります。

題名——詩集 青嵐  
著者——梶浦正之  
刊行所——詩文學研究會 東京市麻布區霞町一番地  
發行部數——限定二百部・各冊番號入  
外觀——四六倍大判・厚表紙・函入  
内容——詩四十余篇・肖像・肉筆自署附  
内 容——内容紙百三十斤アート全模様二色刷  
價——金貳圓・送料十四錢

☆ 試 作 欄 ☆

乳色の肌はあなたの匂 西 本 輝 子

乳色の肌はあなたの匂  
白樺の皮を剥いては剥いてはあなたの仄かな匂を追  
ふてゐた  
ころよよいペンの走りはあなたの筆蹟に似て  
いちまいいちまいにあなたの名前を書いてゐた

木肌に浮ぶ細長い淡茶色の斑点を愛でながら  
時刻の流れを忘れたまゝ指は動いてゐた

ほとほとと胸の扉を叩き去つたひとよ

そこはかとなき白芙蓉の匂を残し去つたひとよ

眼に見えぬほゝえみ

耳に聴へぬさゝやき

私はそれをどうすればよいのか

翅を静めた青い蛾のやうなシェードの下  
木皮を剥ぐ動作は眠つた壁の面に浮彫となつてあな  
たの横顔に似てゐた  
乳色の肌はあなたの匂でもあるか

虚なる行爲 山口 眞 佐 子

水つばい咳聲とともに喀き出した血糊、酒場の女の  
褪せた唇に浮ぶ口紅よりも赤く美しい 花瓶にそそ  
ぎ入れて白薔薇を挿せば赤薔薇となるであらう そ  
の液体にうつる 私の貌もまた悲しい秋の蝶の姿に  
變る どんより開いた两眼は黄ばんだ西日と共に力  
ない視覚を探す 白い唇は粉ふき柿に似てやるせな  
く分かれ 頬は鉛色の鈍い古鏡の罅に似た光を沈ま  
せて幽かに痙攣を始めた すべては白ちやけた頼り  
ない霧のやうなものに化さうとしてゐる 私はいま

力を色素を 乙女らしい希望の虹を喀き出したのだ  
！ じつと耳を澄まして覗へば 胸の彼方から 空  
虚な低い音楽が流れる…

静 寂 境 鶉 直 浩

夜光虫が木琴を叩いてゐる。

逃避する波にリズムがヒヨロヒヨロと破れさうだ

脳味噌のムツとするやうな藻屑の中に

私はまるで放浪者のやうな姿體で

無数の夜光虫の冷たさを愛してゐる

淋しいな……

オーイ誰でもない、

Xの峠の割れ切れなくなつた。私の横面を

想切りはりとばしてくれまいか

朝ともなれば

あんな海の花も消えてしまふぢやないか

リ ン ゴ 石 塚 ま さ 子

白い皿にリンゴの果がころがる はちぎれる若人の  
心臓 血のこぼれる様な果皮には少しのわだかまり  
もない みどりごの唇の様にすべつくうるほひ  
そして聖い微笑がもれ ザクツとナイフを入れ、ば  
足跡一つない雪の野 香氣のたゞよふ處女のはだ、  
そつと味覺にふれてもしゆつととける快活な甘を、  
とめの白日夢の云ひしれぬあまさを、それでいてこゝ  
ろよいすつばさ——何處かにふれるかすかなほろに  
がさ あまくつてすつばい……きづかない心に私  
達はリンゴを舐がいてゐた

残 光 加 藤 静 夜

黄金の巨龍は黒雲によじのぼり  
波雲をけやぶつて私達の視界から去つて行つた  
夕暮が導者となつてやつて來た  
白い浴衣に眞赤な七木爪の花を包んで  
たのしい夕餐のだんらんを待ちあぐんでゐる  
堇色の丘に聖なる影を縫つけ

過去の朝獅子の聲に勵まされ

深い海底にひた／＼とよつて行く思慕

睡よりとかれやがて白衣の雲が馬にのつて

遠い煙火の煙りが紫の百合を抱く

螢草に狐色の髪が――

暮色をとりまいて腰を下した

やがてみちびかれて行くのを夢みつゝ

### 鏡による自画像

伊藤道子

赤い覆を取り去れば その昔いろいろな時勢の翳  
を映した鏡に私の硬い表情を近づけることが出来る  
激しい推移に疲れ果てた面は所々鋭く現實の苦さを  
すき透し乍ら なほもぼんやり私の眸を 鼻を そ  
して私自身をとらへる。頬に横切る哀樂の線まで映  
しとることは出来なかつたが なすりつけた暗い紅  
色が余計に暗く滲むのをみつけるのはたやすかつた  
につと笑つて唇からもれた白い齒數をかぞへればそ  
の姿体にはかつて丸鬚で縫物に余念のない若い日の

駆けたら

手足は溶けて

後頭部だけが

錆びくずれる石の様に

ぼろ／＼振り落されて行くだらう。

### 雀

伊藤智海

淡水色の梢を透して大空の光を背に微風とともに立  
ちのぼる夏雲の片々に似た雀よ  
柿の若葉に頬をすりつけたりして糧を求めぬ雀よ、  
小さい虫どもが梢にいとなむ生活を着してちよよん  
ちよんと朗らかに歌と共に躍る雀よ、僧房の無爲な  
る小半日を雀らの動きに私は見入るのであつた。

### 回想の黄昏

皆川令子

それは如何なる樂器であらうか、地平線の森影か  
らむくむくと匍ひ出ではじめた夕靄の流れはアンダ  
ンテ・カンタビールの曲ととけあつて迫るのであつ

母の面影や指先ほどの黒点に強過ぎる父の視線が浮

んだりする そつと冷やかな鏡の肌を両手にとつて

胸へ押しつけなどした すると白光の面に霧の膜を

つけたりはがしたりする呼吸のリズムのなかに遠い

遠い祖先のざわめきの數々が流れた その一人一人

の言葉を聞き分け乍ら亦そつと古い木箱の奥深くへ  
押し入れるのであつた。

### 断

### 章

稻垣美子

### 夏

古葺のひなた水に

ぶつり／＼くずれる泡つぶ

いちどくの葉裏に

層雲を求める蝸牛逆立

### 頭痛

縁に湧きかへる田野を

紫陽花のぼける淵邊の丘まで

た。

ここ、ゆるやかな気体と音楽に抱かれた木影に藤  
椅子は二人の沈黙を隔ててはゐるが、いつしらす卓  
上のグラスに苺のルビーは乳色のなかに融けあつて  
濡れた唇へ運れるのであつた。

それは如何なる睡魔の仕業であらうか、いま私は  
嬰兒の臉に誘はれるまま桌の一聲ごとと同じ回想の  
フィルムにとけてゆくのであつた。

### 注意

△ 入會希望者は作品に返信料を添へ會則を請求され  
たし。

△ 寄贈されたる新刊詩書並に詩誌の批評紹介をなす  
△ 本誌見本希望者は三錢切手同封申込次第詳細通知  
す。

△ 次輯原稿會費締切十一月末日

△ 右の通信はすべて左記編纂者宛の事

愛知縣海部郡佐織村勝幡 梶浦正之

振替名古屋二四八三五番

編輯後記

本輯は例の遅刊を懼れて早急に編輯を進めた爲に數氏の原稿を逸した。しかし、充實振りは認めて頂けよう。川口氏がエリユアルの作品を巧に傳へてくれたように次輯からも他の會員が誰かへ譯してくれるであらう。現在吾々の周圍には屬々として有力な新人が出現しつゝある。本輯にも實力ある新加盟者、新人を各欄へ推舉した。最早會員會友の區別すら必要を感じなくなつた。この時局下に本會の機構と本誌の形式とを不變の儘續行してゆく事が如何に困難な事業であるかは謂ふ迄もないが、責任ある小生は飽く迄も守りつづける覺悟である。本誌は創刊以來、仲間以外の寄稿は一切掲げてゐない。この一事を以てしても吾々の新興的詩業の意義は自ら明かである。情實や利害で因循姑息な妥協や排撃が詩界に横行しようとも吾々は絶対に嚴正批判を相互に交はしつづ前進するであらう。詩人を群盲ばかりと思惟してゐる人は哀しむべき存在とならう。大乘の見地にあつて自らを鞭つ新人群の簇出の前に吾々は何を捨てても一肌ぬがねばならぬであらう。

一九三九年の地球の半面は未曾有の慘忍な嵐の襲ふ處となつた人類の至福のため營々幾世紀に渉つて礎き上げた西歐物質文明は逆に人類殺戮の爲に動員される。この秋に當り吾々の精神文化の使命が那邊に其の目的を定むべきかは亦緊要な多くの問題を提出するであらう。(かぢうら)

詩文第	編輯者	詩文學研究會
季文第	發行兼印刷者	堀口太平
學四	印刷所	詩文學研究印刷部
刊研	發行所	東京市麻布區霞町一番地
究	發賣所	東京市神田區神保町上田屋書店
	大賣捌所	東京堂 東海堂 北隆館 大東館

昭和十四年九月三十日印刷  
昭和十四年十月十日發行  
【定價七拾錢】

濱名與志春著	現代詩	七つテオリア	菊半判 極美本	定價 壹圓貳拾錢 送料 拾四錢
木材茂雄詩集	貝殼日誌		四六判高雅裝	定價 壹圓貳拾錢 送料 拾四錢
池田日呂志詩集	夜への歌			定價 貳拾四錢 送料 拾四錢
國廣勝太郎詩集	天使の饗宴	新刊		定價 六拾方頁 送料 拾四錢
塩野保男著	投錨	詩とアフオリスム	殘部 僅少	定價 壹圓貳拾錢 送料 拾四錢
安田吾朗詩集	歴程		四六倍大豪華版	定價 貳拾四錢 送料 拾四錢
梶浦正之詩集	豹		殘部 僅少	定價 八拾錢 送料 拾錢
川口敏男詩集	花に流れる水		絶版 近し	定價 壹圓五拾錢 送料 拾錢
西山五百枝詩集	船		四六判箱入美本	定價 壹拾錢 送料 拾錢
詩文學研究	第一輯	定價 八拾錢		
	第二輯	定價 六拾錢		
	第三輯	定價 六拾錢		

發行・取次 詩文學研究會 東京市麻布區霞町一番地



木下夕爾詩集

# 田舎の食卓

序文 梶浦正之 八四六倍大判・舶来コトトン・貳百部限・定價六拾錢

花粉と蜜蜂に匂ふジヤムの掌、巷の雨に落葉にヴィオロンを聴くヴェルレーヌの耳、そして仰角が碧空を截つたりブレンツォの泡沫に愛人の貌を幾何學的に見るエリユアールの眼、此處に蒐められた君の詩篇に、僕は之ら西歐の歌人のすべてがあり、またすべてがないことを識る。何故なら、君はあの優れたる掌と耳と眼とを一度にこの田舎の食卓へ招待してゐるからだ。不幸にして僕たちは唯果實を皮ごと嚙る單調な一つの口しか備へてゐないのを悲しむのであるが、この麗はしい君の饗宴の末席を占めることの欣びで一ぱいである。しかも愉快なことは、この食卓の微笑の葩が疲れる頃には、爽やかなスコールを通過させるといふ君の詩法の秘密である。

正直、君のやうな新しい抒情性を完璧に近く体得した詩人が今日の日本に幾人あるであらうか。この一巻の詩篇は既に一家の風格を示してゐると斷言することは必ずしも過言ではないのである。君の詩のよさが動かし難い一つのウニツクとして認識出來得ない人々と僕たちとは遠い距離に置かれてゐることを感ずるのであるが、君は寂寥を抱くに及ばない。大學・堀口氏が賞讀したごとく少數の確乎とした具眼者が嚴存してゐるのだ。そして更に現在僕らの周囲にも優れたる眼の多くが生れつつあるのだ。(かぢうら)

アプグループのやうな光る

スコールが

夕爾・木下の爽やかな詩集がやつて来た!

詩文研究會刊

東京市麻布區霞町壹番地

丹羽哲夫 詩集

# 緑の假睡

序文 梶浦正之

この人間の知性の畏るべき一虚構、それは定められたる嚴存の數量に似て、或は之に到達する事の不可能な詩の一示標であるかも知れない。それに要する吾々の努力は、五官と思考との受け亨べき一切のリアリテの消化であり、その反應的作用としての現代詩が有する一切の詩法と、尙その上に創造され得べき新手法の數々の奇しき精華の一致に外ならぬ。

之等の優れたる作者と讀者とのみが冥想し得る形而上學的な透明の夜の帳に映る一つの驚異、感性と思考との渾然状態。吾々は此處に、この少數の詩篇を盛れるささやかな一巻の裡に、詩の絶對的數量の一指標へ向つて、その宿命的誤差零〇〇〇〇……を遞減しつつ進む優れたる近似値數の粒々を認め得るであらう。

(梶浦正之氏「序」の一節)

四六判・全アト・二色刷・箱入

定價壹圓・送料六錢

詩文研究會刊

東京市麻布區霞町壹番地

各册番號・定部百

著之正浦梶

# 詩の原理と實験

★未だ嘗てなき現代詩の生きた新教科！

特長（評家・讀者の讀後感を綜合して）

1 明確なる理論の体系組織

單に詩の局部門の研究を集成したるエッセイ集に非ず。如何にして讀者に詩の本体を認識せしめんかに最大の目的を注ぎ組織的に書き下したるもの。

2 實證實驗を基調とせること

所謂理論のための理論に墮せず。一言一句すべて科學的乃至心理學的實證實驗を伴つて書かれ、現代の詩歌人が今日直ちに詩作に活用出來得るもの。

3 文献の廣汎且つ正確なること

引用言辭の出典を一つ一つ懇切に註釋し、所謂學者の良心を以てせるもの。

4 論旨の簡單明瞭にして約要を得たること

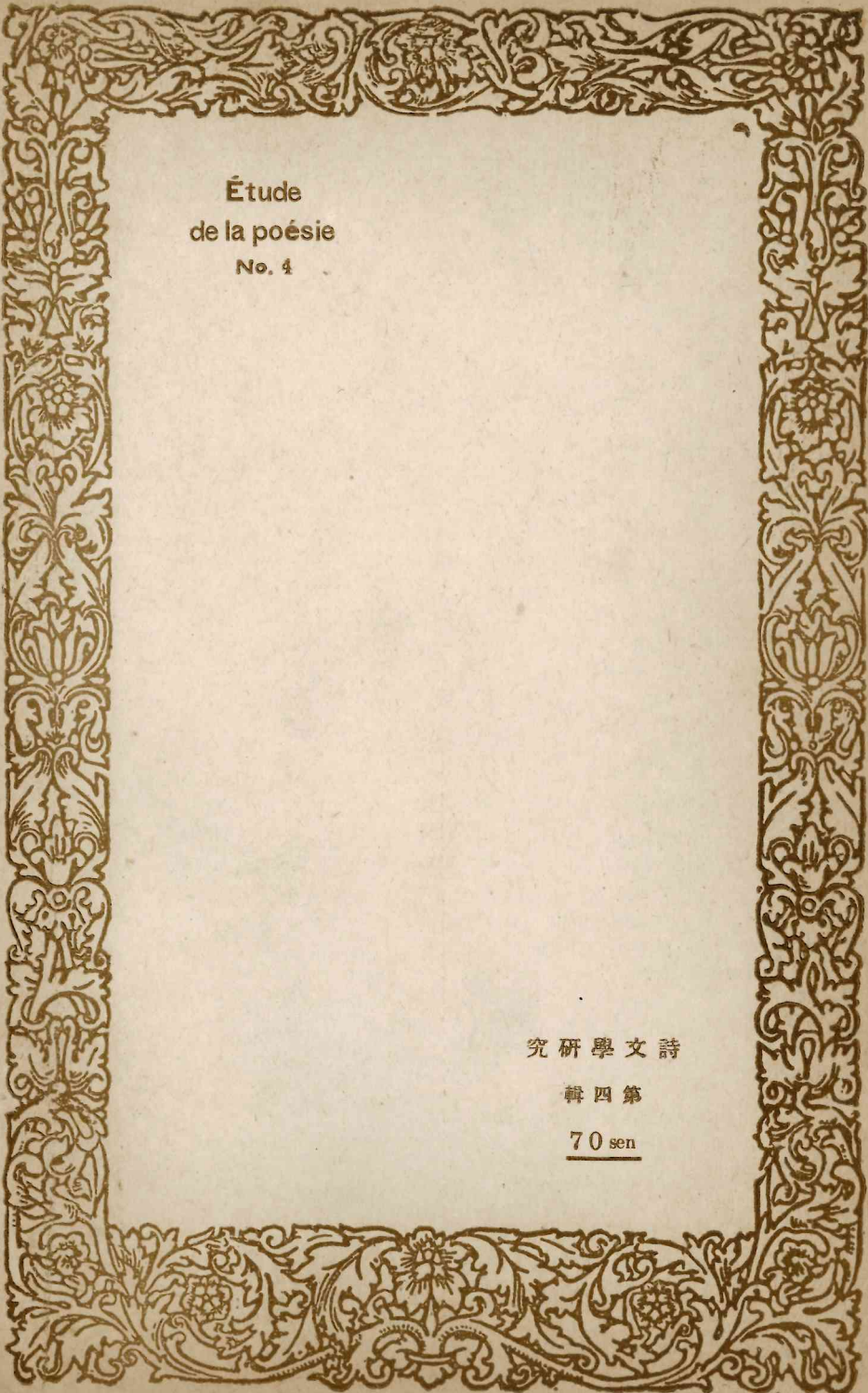
尅大なる頁を要する文献にあらざれば到底之を顯し得ざる論旨を極めて巧妙に約要したるものなるが故に初學者と雖も容易に其の論旨を把握するを得る。

★本書の眞價は何よりも先づ讀者の聲に！

錢拾料送・錢拾參圓壹價定・本美入箱別特・紙表厚判六四

詩文學研究會刊

地番壹町霞區布麻市京東



Étude  
de la poésie  
No. 4

詩文學研究

第四輯

70 sen